# 雜組

昭和十一年一月以降

特別
14
1919
472

176737

# 年賀電報

オノミチ　一五〇五
ウシゴ　メク
ヒガ　シゴ　ケンチヨウシ
イチシマケンキチ

アケマシテオメデ　タウゴ　ザ　イマス
オノミチリウコウデンニツソン

676

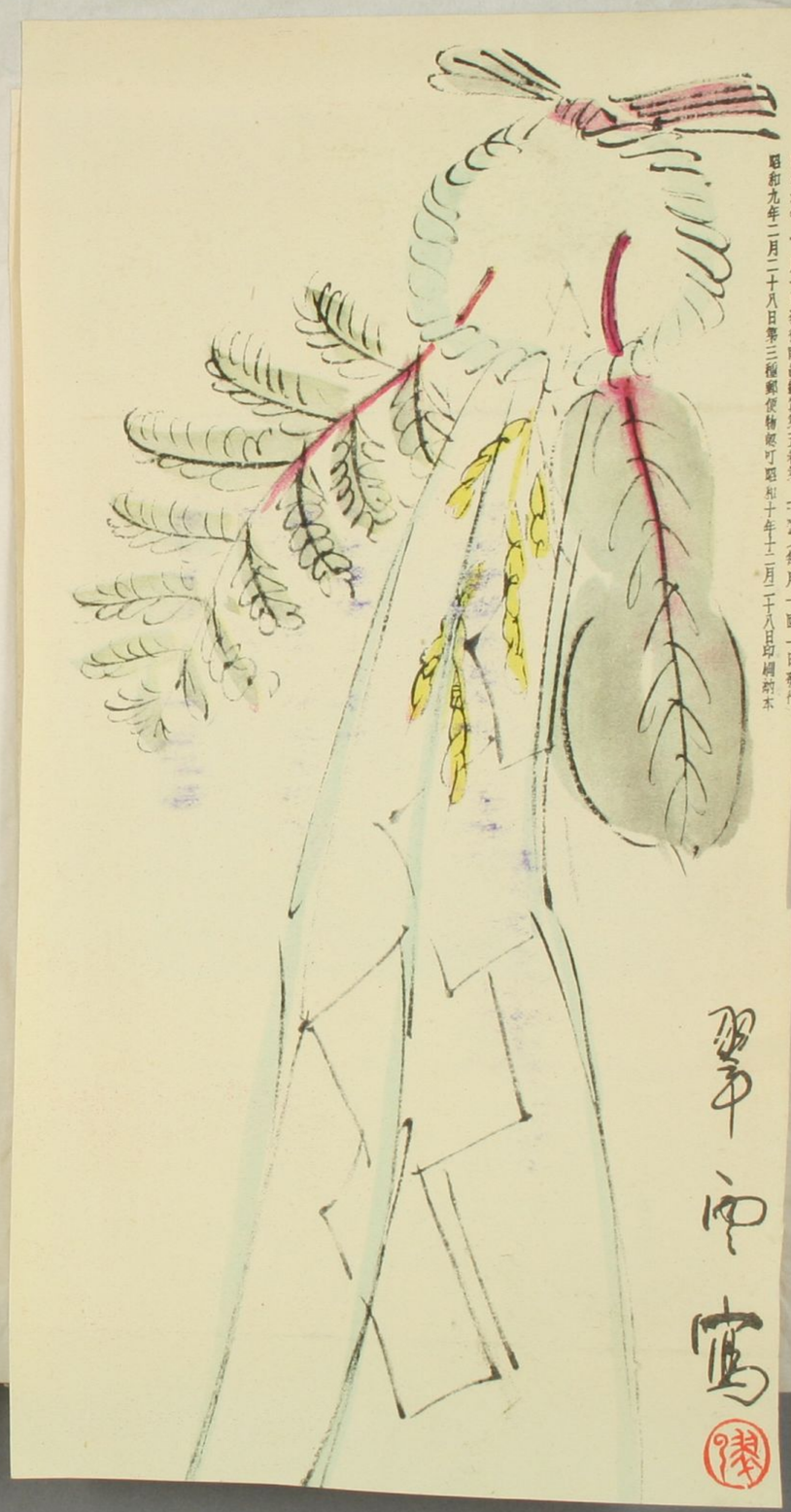
牛込 11.1.1

省信遞

834

凸版印刷株式會社印刷

昭和十年一月一日發行　時事郵便料金第五種第二號（毎月一回一日發行）
昭和九年二月二十八日第三種郵便物認可　昭和十年十二月二十八日印刷納本



翠雨寫

176737

# 年賀電報

オノミチ　一五〇五
ウシゴメク
ヒガシゴケンチヨウヘ
イチシマケンキチ

アケマシテオメデタウゴザイマス
オノミチリウコウデンニツソン

676

逓信省 834

凸版印刷株式會社製印版

小竹初倘相依舟
送至神崎予亦同
性別後餘酔未解
被拿兩眼既酔時漸
落看江洲香霧
水光接衛秀樹
鬚柳疎、相映
會雨霧驟到
衣帶沾濕涼冷
筆盡一舟内凄涼
殊甚感至生一往
情深乃覚眠游
和僕一紅地也

田能村竹田筆　目擊佳趣帖よりや

定豫蔵掲設解氏雨香見相に號次　藏家舊侯戸木　本原

38- 9258

〇ことし丙子元旦自分の齢七十七妻も七十一を迎ふ
斯る長寿を生存し得べしとは思ひもよらざりし
僕し現実世界を迎へて見んば何んの不思議もなく、長寿を幸ひとしるべき別に候はなし
長いしくもあらず、別して近年集めの有様がなかなか、八十九十で難儀な大役を勤める者が
西園寺侯あり前義宣子爵などあることを思へば、長寿などは七十こぶれなどのことはあらず、唯だ
七十を死なずに〇年を重ねたことをうれしく思ふのみ。

今年全国の年賀状の数は九億といふ紙の数なれば、日本一億の国民が一人九枚づつ出す割合か、自分

八十数年前から賀状を出すことを廃しておるが、おる主張のある訳ではない。唯だ無駄を略すまでということにすぎないが、毎年年々各地から寄せられる賀状は二三千に及ぶ、之を調べて見ると、未知無名の人々より来るものもある、極めて疎遠の人や、殆んど其名の記憶すらできないような多く来るのを見て、賀状も各々が存在を知らせる方便として意味があるかと思はれ、寄せられたものを一応は調べて見て人々の消息を知る便りとしておる。

例年のことながら餅腹の消化を助けんと娘を伴ひて散策がてら家を出で、近所の八十時頃先づ附近

の表徴の神の境内に入ると左に
摂社の神人社延喜八の神社
とあるが社殿は設けず
うの比、砂を盛り人の如くする神の遥を遠く行くと
見えるは、奥の味ある神やかな
保護をかくしいまと感じた。拝延喜八の巻の侍る
院寸の墨久流にあると
余が随喜を収めんとてそのまま
此のものである。

見ると九条の鎮国神社をこゝに遷
遷えた大神の大祝様
を祈るべき行事をなすべき
標原製

ものぞいろいろ
ばかり石庭様のさまざまの
神社の妙趣味を添く、従来設けて見栄えの
ものゝ大きさのと献じた
兵仮陰金比の献する所と
榜を置き簡金社
へた。北の拝殿の世界一と
園十六河と云われ、昔花
の内庭降が納入されてみ
を掬い流石の将士奮戦
の面とも
近と鎮国神社境内の片隅を

標原製

# 隅田川七福神

隅田川の名の世に顯れたるは一千餘年の昔「なにしおはゝいざこと〻はんみやこどりわかおもふ人はありやなしやと」の名歌を遺したる在原業平朝臣の東下りに其の端を發するものなり。卽ちわが隅田川は業平朝臣の遺詠によつて當時旣に歌所として都人の間に喧傳せられ後世に至るまで都鳥並びに淋しさの名所として日本國民の間に名をなすに至れり。一例を擧ぐれば次の如し。

元弘二年(六百餘年前)の亂に藤原師賢、公敏、季房、藤房等が北條高時のために捕へられ師賢は同年五月下總に遷流さるゝ事となりたるが、途上隅田川の邊にて「こと〻ひていざ〻はこ〻にすみた川こりの名きくもみやこなりけり」と詠じたる事實が新葉和歌集に載せられあり。おもふに師賢が、六百年前の當時に於いては都より最も邊鄙の地たる關東奥地へ遍流さるゝ途上隅田河原に於て在五中將の故事を想ひ浮べ現在並びに將來の己れの淋しき境遇並びに都戀しき心狀をかこつて逃懷したる如き眞に都人の隅田川に對する概念を言ひ表したる好例といふを得べし。

降つて太田道灌が「わかいほは松原つゝき海ちかく富士の高嶺を軒端にそ見る」の名歌を詠じたる事によつて名高き江戸城を築くに當つては道灌の詩藻を慕つて學識高僧の來往するもの年と共に繁くなり、道灌は常に是等學僧を招じては宴を張るごとくもに龍ノ口より書肆を隅田川に浮べ詩歌を賦し管絃を彈奏して四圍の風趣を愛でたり。ために江戸を訪れたるこれ等學識高僧達の隅田川に關する遺章今に多く殘されて四百餘年前の隅田川を髣髴せしむるもの多し。

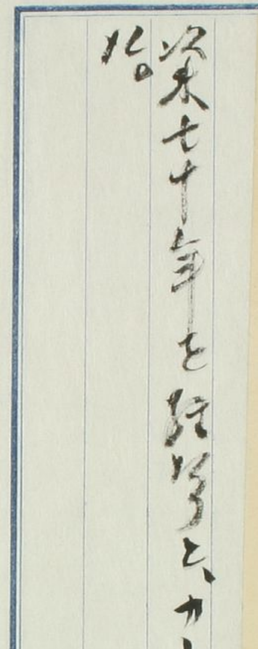
天正十八年八月十八日德川家康江戸に入城するや、それより時々公駕勅使の都より下向するに至りて德川氏は之が接待に非常に力を盡したるが、特に勅使の欣ばれたるは隅田川御遊覽なりき。故に勅使下向に當つては必ず隅田川沿岸に招じ三圍の艇木に船をもやひ勅使の道遙に任せたるが、この一事が益々隅田川の聲價を高むるに至り一度江戸に足を踏み入れたるものは士農工商を問はず必ず河畔に昔を偲べり

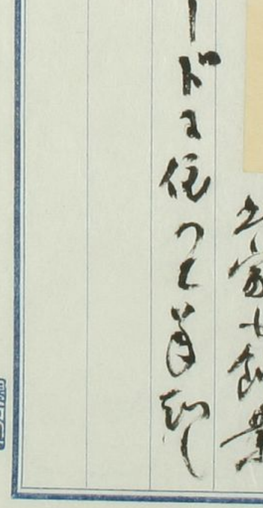
元祿六年六月二十八日榎下其角三圍社頭に於て雨乞する農民に代り「ゆふたちや田をみめぐりの神ならば」の名句を吟じてよりは彌々隅田川は江戸市民に親しまれ、江戸最後の爛熟時代たる寛政より文化文政の交に於ては江戸に於ける一流の文人墨客連は好んで此向島の地に日を暮したるが、之等文人墨客の遺作遺蹟は今に多く殘され、化政時代に於ける江戸文化の淵源を偲ぶに足るべきもの多し。現在新春に於ける東京年中行事の第一として盛行さるゝ隅田川七福神詣も之等文墨の士の創始されたるものなり。卽ち狸田鵬齋、大窪詩佛、酒井抱一、谷文晁、太田蜀山、巻菱湖、朝川善庵等の如き諸大家が常に隅田川沿岸の風趣を愛でゝ向島の地に清遊を試み百花園を草創して己等の別業となすなど其の日の遊樂の計を定むるに苦心しつゝありしが偶然にも隅田川の東岸に七福神に緣故ある神社佛閣の存在するを發見したり。例へば三圍神社には享保以前より商ひの神として大國惠比壽二神を祭り、弘福寺には鐵牛禪師開創以來黄檗禪に關係深き布袋尊を安置し、長命寺には德川家光によつて名高き長命水の緣故をもつて弁才天を奉祀せられありし如き、又多聞寺は毘沙門天を本尊となし、百花園には開創當時より草木と天象との因緣をもつて福祿壽尊を偶然にも諸大家によつて祭られありたる等、眞に奇緣といふべきなり。之を發見したる諸家は協議の上一年の計を定むべき新春の江戸年中行事として最も相應しき七福神詣を新に隅田川沿岸に興し江戸市民を幸福繁昌に導かばやとて關東の名社たる白鬚神社に新に壽老神を奉安して拔て發表さるゝや江戸市民は競ふて新春七草までの隅田川七福神詣を行ひ一年の安心を求むべく賽者市をすに至り現今に及ぶ。

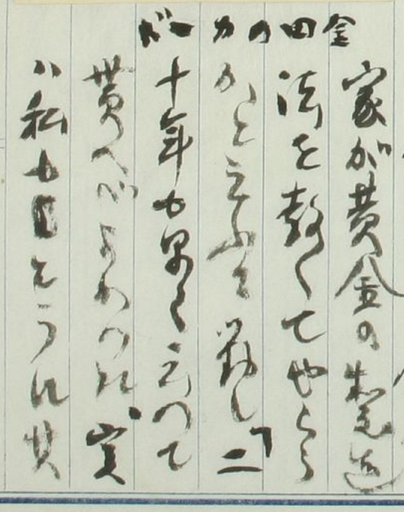
標原製

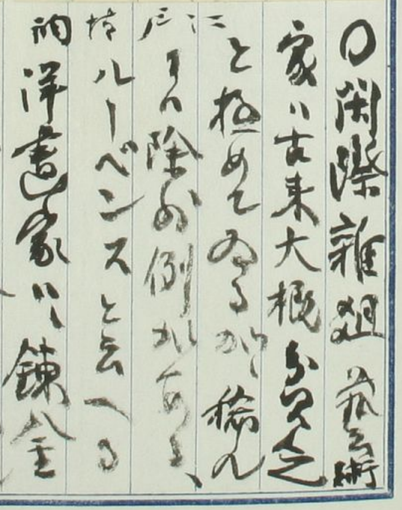
## ゆたか杓子由來

元祿六年は春以來の早魃にて葛西の水田には一滴の水もなく農民の命の綱と頼みし稻も將に枯死せんとす。ために農民は連日連夜の雨乞を始め向島の農民も小梅村三圍稻荷の社頭に集ひ祈願をこらす事數日なれどもその効なし。時に六月二十八日如何なる神の引合せにや蕉門の俳人榎下其角は門人ども、もに稻荷に參詣すべく來りしが、彼等農民の心狀をあわれみ農民に代りて「ゆたか」の三字を折句とし「ゆふた地や田を見めぐりの神ならば」との雨乞の句を獻じ靈驗ありし事は衆知の事實なり。以來農民は毎年六月二十八日に「ゆたか」の名稱を附したる杓子を各戸に頒ちて其角の德を稱へ其の恩を永世に傳へんことに勉めたり。この一事が江戸市民の間に喧傳せらるゝや當社に詣するもの群をなし、春秋彼岸には、このゆたか杓子を請け歸りて日常使用の上、無病息災を願ひ、新年に當りては社頭に賀詞を呈し尚この一年の幸福を祈りつゝこれを享け歸りて旦に夕に「ゆたか」ならん事を念するを例さするに至る。









ダーローの戦術のイートンの運動場の勝ちことが世界に傷のつけ始めの動機を作る以外の他の時計おいてイートン校生徒ならあれ時も石炭屋の倅ならあるから、何の手柄で何もなく偉くされることといどころもある倒れ方をそうしたら飢おじ名もなく終つた山本権兵衛が出の仕事を困つてみる所へ役の大名を作しん。

富豪かも知れないが日本の財閥家としても名のあつた松方家から華族の財産をあつけを受ける十五銀行を潰し松男が出た、そのレニンそ頼ら通とそこそこな人物

複原製

かが、がリリンの輸入でソウエトと提携してあるう通七條岡が来をこれら富豪とくに何の人もが明の機会に土方久元伯の家へ及通呪が出てソウエトロシヤの生命でもあるけて、まず位置上を命でもある。華族通の口振のつくらしてみる、ニンナ通中の傷出すの困ることが其住地を狙つて信する所を特ずるお世話流行り世の中の玲瓏家となまる。

乃木大将の其の遺言を実行浮共、却て汚名を残す始末この前きることの好す洞おもすこと候とあつも

乃木将軍を祀ることを企画し、新たな乃木家を
真ずの形式で、山荘主も利子育の木を伯爵とし
程々の小細工を弄したが、当時乃木大将の主流な志
を言うこと、四こか小細工を弄するから逆効果
切る人の人と人こ表れる以外、名家を継ぐものと
言える上で乃木が許のさんとなるべく、実に人を
惹きつける話で、天皇もの義であり、乃木の貴さ
の貴さも益々なんて素晴らしい。
旧臣から乃木神社創建の申し出を大喜びで
を大書した標札が建つのである。

複製禁止

の分正を述すのでいるが、
かう人達が他の見栄えのよいものに
で火災で焼けるの北斗神社
千ト昇や遥きれのもの
威することを想うと何とそうく助かる。
八地つて元旦の汽神宮と参拝した一百万と
達したと言い、そしてお人も天伸前と元旦の
ふが北の光の参を見て何と嵐山であろうか。この
光の家こそ他の四土まえんとするものである。
四国の愛媛から郵便利義しに投いた見ると、
主流な天満宮の神札と供膳の菓子が添へつてある。
そこに附随のお札のお札の標題と、私の寿寿を神前と

複製原稿

かえりてやうやく墓かすま、
霊智霊能の人間も鳥の真似をして
出蓋の冬を偕さんとし鳥の真似ばかり
て摩耶は元翔のあ処を示し日の速力の遠かれ鳥を凌
駕するものにて。えが元行機
ことのい鳥真似のことくこぶ
除幣であるかく、西洋北西
日本が必真似のもしてあるかい
如実をかくんとしてあるかいこれも鳥のことくして成かし
魚のやうん方向を誤らず進退(進退)俊捷自在なる海中
を游弋し、深沈の随意、その速力も速く魚を凌
くやうにとのこれ誰んが言ひ得よう。元行機が

そらの成功を収めたのハツイ昨
を重ねれば現状のことくである、魚
おろきを得んや、魚の真似
戦争い魚鳥の戦争で海洋
くどうもこんなことをしてて。魚
もの一社の特許を有する日本海中の潜水艇艦
駕奥の二尺を将来こうさんこと
所である。

○書生時代に書物が取うといの此
ツトの事をいい話をんをしまた
まてとくと一冊の洋書を買
いろくのことを感じた。ピッと
そらの成功を収めたのハツイ昨大戦後の事で二尺と云
を重ねれば現状のことくである、魚の真似とそ何人も成
おろきを得んや、魚の真似
戦争い魚鳥の戦争で海洋
くどうもこんなことをしてて。魚
もの一社の特許を有する日本海中の潜水艇艦
駕奥の二尺を将来こうさんこと
所である。

○書生時代に書物が取うといの此英国の政治家
ツトの事をいい話をんをしまた時
まてとくと一冊の洋書を買
いろくのことを感じた。ピッとは父子共に内閣を立ち英国

を持ち国民の信を得ることに一心一向国の為に尽くすのへつらいであらう。
のことという多くの場合そうでなく私事の場合そうでなく、軍人側とお高くとい、柿谷父子が共に国家のやうなことい、大概父の勲功や其の衣蔭で子は不肖も七光の栄耀を貪ぼるからこそ、ヒットの場合の全くこれと異つて、何んとかして英国の為に尽さうとする点にヒットの方が重点があるとも偉くこれまた偉さの階段のやうなもの、実は彼等の仕事相のようなも容易く往昇の比ではなく、実は彼等父子共に議会を先の征服した為めであつて、彼等



国政界を天名を恥しめるの如きものが
父子共に大政治家ぶりをうらやましがるようにヒットとなればさしても父子が
どちらかというこのようないことが
偉いから多くの場合、父子どんとそハッキリせずしん酒々
おやうなことがある。此父子共揃つて不思議なまで
の清廉家で愛国者である。世の混濁しし時き清
廉家が出るのいう不思議はないが、混濁を慨して主
のの如きうな、其の性格が時流と反おかであるべきで
ある。混濁の世の中を思ふとあるが混
濁不潔と飽き飽きもあるこれ等が清廉の
人を(欲)まるで自分の敵かである。ヒットと父子い英
国の混濁の時き生れ此為の世を慨して廉潔と自

複原製

第二皇子殿下の御降誕の喜びと共に迎へる昭和十一年は干支の上でもその第一の子歳でもあり新らしく進む上に何によりの歳だと思はれます

私も一切を新にしてこの意義ある年を意義あらしめたいと念願いたして居ります

折から飛騨の高山で得た古い木版の鍾馗圖は御降誕を祝福する上にも本能での邪念邪氣を一掃する上にもよい事と存じまして賀詞に代えて御目にかける次第であります

丙子元旦

西澤笛畝

の義擔と大新い譲今を征服して以來、英國のこと
き回状で征服者が入つて宇宙の順序が変
るやうな、荒ビットが二十四歳で内閣組織とそうなな
とい不思儀ともふべきことがあるも荒ビットは健康
を害まして早く致し、老ピットと共に文後の
息をひきとるまで國事の鞅掌し、其の死する時は
父子共に癌病の回復を祈りて死んだ此
大政治家の時代の英國の國難は亜米利加の獨立
戰爭もあつた、那破崙の侵略戰もあつた此の役等
父子共に連邦等の四難を救ふたのみあ

時代、四軍の花形の時であった。
い美しさとあいまって、若いピクト
一生を終る始相許す婚人が
を断念して共理由も知らず
復等らしい出来ごとであった。
往々の人知れぬ父子のめぐり逢いが
業を席巻したナポレオンも死者ピクトの
為めに遂に挫折し、セントヘレナ流竄の身となる
（これ未完ピクトは千古の恨事と謂う）
四の録。

○世界の痛快男児とうたわれたナポレオンを推すにやぶさかであるが
彼の人を救い国を奪いサンくるまをやった彼人に困りこ

標原製

うら北男を恨むことのない。死かう
身を果すまで感激しないのと一般で
行跡が面世を辺ハタ、のハ「快」の一字が何まで随伴してるから
（勇気のない者）が嫌う

## 危険な生き方

本当の偉大な人間は常に苦悩と危険を生きる
ナポレオンの常識の冬至のさんかを抜きること
危険思想という常識を実行と移さんとする
ナポレオンこそ誰よりも死を怖れていたろう兵士が
死を同する時の死の即ち
の中を避けるように
ふんいんく「英国の侍
望す、各人が日本人を

臆さん人こと、ハラファルがの標語
伊太利の諺に「若し人が成功しようと思うならば
人にあってはいけない」
奈翁曰く「余の辛抱勤勉は敵をも味方とする
まで、如何なる事件をも忍び得ることを
する以前に於ても此の事件を二年以前に於ても
奈翁はフランスやがて後年の偉人たるの素質を
うやる偉人たる素質を剥奪し去らん
玉翁曰く「余の大なるところは、実に冷静性
を帯びてゐた。」
将軍の剣をも抜かず
奈翁の勝利の前には敵のやで開戦

する
奈翁曰く「市場の平民のルートヴル（一度大の言葉で
ある
奈翁の帝王とするところは「余の現在の境遇」と
つまり、あのフオブール（貧民窟）の残民が自
分の唯一の崇拝物なりや
奈翁云く、余の世人を眩惑せしめ、夢倒せしめる
はみな止まれ、若し余をして言論の自由を許し
ざるとせば、余の権力の三日と続くことが出来
ぬであらう
奈翁曰く「余は只一人の情婦があるこれ即ちアラシス
である。余の休んでいる時を防うぬ様をする

血を、主の宮を浴ぐる、平安の生命を
安らかに抱めい立てることんと今ん歩くるひもくら

高浜虚子

時うけん隠のもるる
城跡の雪の清きこころん

八田知紀

いくそびかき消しそと浴みかくる
ふや御園の姿ろくん

複原製

のハワイから来た年
賀状のおもをの
けそそると名
刺が入
つて
お
ら
ず
の
ら
の
が
貼入せん
みるクリス、マス
カードの一種ぴ
ある

つれと云のみてゐる、彼れの計畫する所ハいつも大きく且つ派手である、彼れの行動ハ世人を驚倒眩惑せしめ於かじまぬ、併し彼れ自ら言ふごとく、いつも冷性であり、決して感情ハ支配されない[redacted]と、彼れハ常ハ自他の心を解剖し亦紛糾の事態を離剖も綜ふハ策を立つ、あまの成るや疾風の如く起こる之れを行ふハ躊躇せず。ぬハ甚危険をも拘まずしる、彼れハ百戰百勝頭腦を席巻し此の偏然であつ、更覚努力の結果のみ、英雄ハ往々偶然ハ出現することもあれど、是の変態ある。亦翁の如きハ真の英雄と云ふべき歟、彼れハ微賤よ生れたるが國城ハよし

○人心を収攬するの術を心得て居た。佛蘭西人の多くの犠牲を拂つても此の英雄を愚むことをしなかつた。縦令人氣を博しは彼自ら云く、余ハ一人の情婦がある、これ即ちフランスである。彼れハ決して節操を破らぬ。彼れハ其血を、其の寶を清く全くに獻でさ、五十萬の生命を寄せハ彼れハ事をこんを弔ヲ獻てるもあるらしと彼れのウヌボレのは劫くまむすらつもみる。若し彼れが王位ハ就く野心が無つたら、永く仰がれたかあらうに、英雄と呼らる人が弱點を免かれず。已れハ心も國人の心も解剖する此人が[redacted]も王位ハ就れの志目を闇人たと云ふべきであらうて。

○新年の初散策に九段の靖國神社を始めて大衆に混を

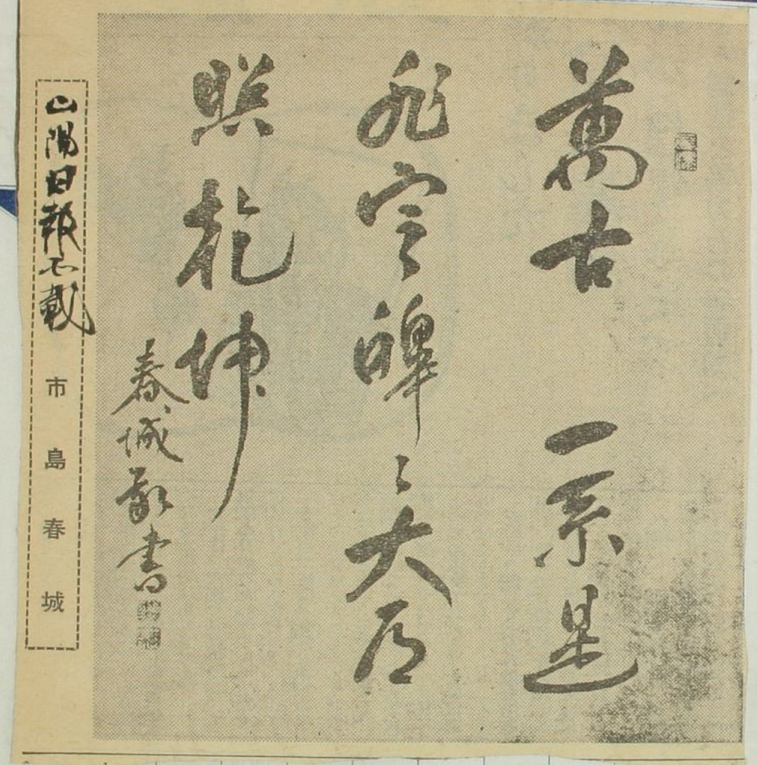
大和撰のもの、境内の遠くつくも左まで大きな
ものか、既成のものの大村の御像そも夜姫のおきな
餅をおさくてすおらくうつむいか回宜)と
象徴するものなり。露骨
力の追悪を象徴するもの後世九条史を書く
人かあるか如き地等祝
文詞を[illegible]筆かめるもの陸海軍の消長を[illegible]後
世をうつす北の神社も姫御前の[illegible]

う。

○平福の出版部で漢籍国字解を出版の時国
つとる墨子の和解書か無つたことを七条漢学の
者か難解とも[illegible]この時こんか和

[illegible]解を為すものを得ざる困つたが、その人の物色最も適
[illegible]人を得たので依頼することゝなつた、その人は恐らく古来如何で墨子
[illegible]み得た人よりと云われてゐる、実際此者の[illegible]
[illegible]ハ謎のやうなところん文郎かも漢文解かれ
[illegible]ものの如く[illegible]ものである。から全部が
[illegible]ものゝ様なるも知れぬが、兎も角墨子の
[illegible]しとゝもかくも[illegible]ものゝやうに早くて
もなんとかの[illegible]しそうく一
墨子は根墨の表天下を得
その旨とめられるに墨子
七回忌、其名の[illegible]

複製




山陽日報に載る　市島春城

按ずるに、

○此の手紙の日附の無いのも、又消印の無いのも、何れも前と同じく、今回市と関する記事を通知する為めに、先ず手紙を出してから、後に新聞紙を送つたものと見える。

按ずるに、そこに傳表とのあつて、文淵家より墨子からくの鉄論が欠くるの多いが、墨子の説の比較的多くの傳数を掲げてゐるが、墨子の書を見ない者は、之れを以て墨子の傳説と為すの恐れがある。故に墨子の説を唱ふる者は、必ず此の傳説を引用せざるを得ない。墨子の説を唱ふる者は、必ず此の傳説を引用せざるを得ない。墨子の説を唱ふる者は、必ず此の傳説を引用せざるを得ない。

複製禁止

特に美しいものを選ひ出さうと思ふが、都合
の良い頃の古典社と云ふ所から、同書日記、古本
日記を合本としたものを発行したと云ふ宣傳
書がきた。書物趣味家が手にしさうなものが、果し
て行かんのかどうか、記入欄の目次が頗る複雑である
から、甚だどうかと思ふ。只今記入欄の細かさる
ものは実用に足らないのである。昔しい今のやうな便利な
印刷の無かつた頃は、いろいろの日記帖の手帳が紙入の中
に携へられ、茶会の流行時代には美しい手帖が
つくられ、茶会の大略を記しておいたもの。或は金石家
が見出すを記し、畫家が粉本を書き骨董家が
道具の大要を記す等、美しく細法の有用り

手帳があつた。其手帳の内は長短大小さまざまのもの
があつて折り畳まるやうになつてゐて、何日でも私
製でも日記でも美しく数を合つて書けるやうになる生来
の手帳もあつた（それは先の紫本のやうな）今日なら
ずいぶんよかつた）日以上の日記帳でも、それが毎日書けぬ日記
でもある。兎角美しい彩の者は備忘的に即時
書きこみ得るものが、あんなに至極便法であるが、給
な工夫をまとまることもあつて面白いものである。
○昨夜の放送によく、東京市の財産数八億七八千萬円、負
債七億七八十萬円正味の財産一億に近いと（一月
七日記）

圖書週報【號外】 發行編輯兼印刷人 渡邊太郎 發行所 靜岡縣沼津市住吉町 古典社


# 合本 圖書日記 古本日記

古典社編・昭和拾壹年版 三五判携帯型 レザー裝三五頁 **定價六拾錢** 送料不要

心にくきまでに讀書家の魂に食ひ入つた名工の冴えを見よ!!
特色なき一切の日記よさらば!迷ふことなくこの日記を選擇せよ。書物と讀書に關する百般の消長は萬事こゝに記錄され、一年終つて美事なる私家版の出版年鑑・古本年鑑は完成する。

## 日々の讀書を貯蓄せよ!!

記入欄目次

日附ナシ摘要日記 いつからでも、いつまでも便へるやうにムダのないのがうれしい。一頁四日分。
藏書目錄 送料・賣却の欄を入れた親切さ!!古本賣買原簿に兼用できるやう工夫した。
貴重藏書目錄
圖書內容記事ノート
雜誌記事ノート
新聞記事ノート
讀後感想錄
閱圖書年譜記入欄
書物貸借記錄 購入希望書ノート 新聞廣告や古本目錄をみた時、買いたい本をば參考に記しておく。
研究文獻目錄
發賣禁止記錄
新刊批評紹介抄錄
豫約出版ノート
創刊雜誌ノート
重要章句拔萃帳 序文や目次も摘錄できる。
新語難語ノート
わが愛する著者
購書費月別計算表
圖書カレンダー 古本展や講習會などの備忘錄とする。

記入欄目次

日記 掘出しメモ 買註文受書メモ 古書見開備忘錄 この三つは古本屋のために必要であるが素人にも役に立つ。
古本目錄受附箋 よろづ備忘錄
日記その他補遺欄
出入書店メモ
注文書籍雜誌メモ
郵便發受錄
社會生活メモ
電話・振替早見表
知人住所錄
考住所錄
參後日のため知つておくべき人物の住所や理由を書いておく。
事故發生簿
詩歌ノートメモ
ミシン入メモ
封緘讀書法 書物の教訓を實行したか?讀書が生活に役立つたか?
わが不審章句ノート 學術書などの難しい章句を書抜いてヒマをみて考究する。
一ケ年豫定表
日課表・週課表
指示票(紙片)

附錄記事目次

特殊出版者名簿 さがしてゐた出版者が他の名簿にあつたためしがありますか?東京堂年鑑にのつてゐないものを集めたもの
出版目錄發行所一覽
古本目錄發行者一覽
讀書家用品商案內 これだ!!やつぱり古典社ならでは氣がつかないところである。
古本市會一覽 東京、大阪の古本の市を表にした。
圖書關係官公職員錄
簡明圖書年表 書誌學早わかり!!
年號算早見表
明治以來年數便覽 これらの早見がどんなに實用的かつて始めてわかる。
新出版屈指書式
古本屋式
海外目錄請求の書方
度量衡早見
鐵道料金粁程早見
郵便小包料金早見 これら便覽はいづれも日常實際役に立つといふ目的でつくつたから不要な說明は一切省き、郵便料金で一々勾を併記したなど一寸したことだがありがたい。
昭和十一・十二年七曜表
年中行事實用五十音表

(御註文規定はウラにあります)

○郷友上野政壮（七七永次）年笑いまる。北人芳名は
生れ早大の初期と得業、昭和文次々と四甲、本年七十七
歳四甲、壮健そのもの。（年齢）
座右銘は「至誠」也。余北人と会ごと大勢
を勧やさるを得ざるに辞もしくは誤ること
あるも、余也業績卓絶の士を指し、死者八十八の布
告の一つ「故郷を想う」のこと
八を去きなど云を北内に収めてるしい云の幸
ること日笑み、彼んの表意をよくくみ取り、余の名表彰
るるるく云く、余の自分の謝とするす
ことこと、拍を主

（横原劇）

とすること此男の習癖はもの拙くとも、余迄の煙
草を廃しめることを失げ、洋烟兼に洋烟を
奨め、而他に押し意見
大のき表ふい手いまる
投す、而して並に思くくる
思の
の到着ちんと
迄うき
一七正も、勲壮口訥、
も頗く、
さる也天の配剤もめる
○今回帝康鋪金の投術に長す、迄く個人旅法
を発刊ちんとー女の標

日の松浦島であることを考え合わせても符合する。
名を今一時ここに記しておく。
日山の法花と同事にて金中平智
坊に就て法を受けたる仏後醍醐
の御宇元弘の初人の投込域
で有ることが分る。自分も曾て此山中を
ぱくこゝへ登りたることがある。其時を
利しかどんな仏像もなかつたが、その記臆もない
うへが、五智如来とある五尊の仏像がある
為ぶ、大日如来が中心となつて、阿弥陀外
ある。曾て黒川真頼翁が此仏像の作者を
尚考えられることもあるが、今存してあるのが
標原製

心もそゝ一般に仏像の脱が原
心の片割んとして存
山麓のある所の幸ひな無事
のある所の幸ひな無事
海を侵さんとさらられて
つてこゝに一寺が立つてあつて北の
の麓の勢ろくべきものがある山田の家もある
流来の麓に過ぎて高田
山田の家に如来宇護
法心の次男が僧の務
ところと初めてゆへ
が附随まるのみで他
心もそゝ一般に仏像の脱が原
山麓のある所の幸ひな無事
のある所の幸ひな無事
海を侵さんとさらられて
つてこゝに一寺が立つてあつて北の
の麓の勢ろくべきものがある山田の家もある
流来の麓に過ぎて高田
山田の家に如来宇護
法心の次男が僧の務
ところと初めてゆへ
が附随まるのみで他

# 上野監督正

為御國人台還
以當官哇布島ロ
使節被
仰付候事
明治二年巳九月三日



# ハワイの奴隷移民
# 救出しの新史實
## 放送講演が機縁で
## 明治初年史に特異な一頁
## ちよんまげ全權

明治政府確立以來最初の海外使節は慶應三年（西暦千八百六十七年）二月徳川民部大輔の一行が歐洲へ派遣されたことで、越えて明治三年には柳原前光を清國に、同四年副島參議を魯國（露國）に、次いで同年十月岩倉右大臣一行の歐米派遣となつてゐることは有名な話であるが、その前年の明治二年九月、米國布哇國に正式な使節として派遣された人に上野景範（俗名榮介）があり、布哇への日本政府最初の使節であつたことがこのほど景範の當時の日記や手紙の發見により判められ、來る十一日開かれる明治文化研究會例會で尾佐竹猛博士以下各專門諸家列席の下に志賀富士男氏が新資料を基礎として講演することになつた□□寫眞と□版（上は使節として渡米した際、桑港で留學生と記念撮影和服の右が上野景範、左が三輪輔一（下右）日記の一節、布哇政府と條約文の寫（下左）太政官からの辭令

## 正直 景福氏の話

なにしろ祖父が死んで五十年も經つのでスッカリ忘れてゐたが、先日志賀さんが布哇移民のことについて放送された際、親戚の者が聽いて初めて祖父のことについて知りたいと思つて志賀さんの宅をたづねたのがきつかけになつて祖父のことがわかつたのでした、六日志賀さんが私共へお出下さつて、いろ〳〵祖父の記錄したものをみて歸られました探せばまだ何か發見するかも知れませんが、今日まであまり關心を持たなかつたのですから誰れにも話しませんでした、こんなことによつて何か明治史の參考にでもなれば結構です

慶の確立を期せねばならないと深く決意したとあり、また米國各名士の心からの親切ぶりが細々と記されてある點などからみると、余程の歡待をうけたことがうかがはれる

歸朝したのが同年二月廿五日で横濱に着いたとあり、歸國に際しあわてたと見え「乘船問際に三輪輔一の革文籠と風呂敷包二つを紛失し、パス・ポートや所持金二千百ドルの御用金を失ひ誠に國家に對し申譯ない」と綿々と綴られてあるが、約三ヶ月程たつてから米國政府から日本政府に右紛失物が送屆けられた時は米國人ほどな國民はないと絶讃してゐる、歸國した翌四年には景範は大阪造幣局、同五年京濱間鐵道開通、同六年租稅制度の確立など矢繼早やに明治文化に甚大な功績をもたらした

複原製

第二万一千三百五十號　（第三種郵便物認可）

# 上野景範の日記

## ニセ領事の惡計

明治文化研究會々員で故志賀重昂氏息志賀富士男氏が過般「明治元年のハワイ移民風景」と題して放送した際に、たまたまハワイ移民救出に明治二年日本を出發した人に薩摩藩士「上野景範」（弘化元年生れ、後年元老院議官となり明治廿一年四十四歳で逝去）のあることに及んだが、それから間もなく一人の青年が志賀氏宅を訪れ「上野景範なら僕の祖父ですが、そんなに偉い人とも思つてゐませんでした、祖父の認めたものでこんなものがあります、何か參考にでもなりましたら」と景範が**毛筆**で詳細に書いた日記などを提供した

この青年は東京帝大文學部副手、上野景福氏であつたが志賀氏はこれは明治史の一ページを飾る貴重



資料であると早速各方面の專門家に通知する一方、その他にも何か景範の遺物がないかと正月早々麻布區本村町四三の上野邸に赴き隈なく調査した結果、政府に仕官してから退官するまでの辭令數十通をはじめ當時各方面と文通した手紙條が發見された

**發端**

この日記によると明治元年、當時横濱の米國領事館内に事務所を持つてゐた米人ヴアンリードが布哇國政府の貿易領事を委託されてゐたのを奇貨とし、布哇行の移民を京濱地方から百五十三名を募り、日本最初の團體移民として渡布させたのであつたが、移民一行が渡布して見ればこのヴアンリードが木村庄平といふ男を手代として募集した條件とは雲泥の差で、全くの奴隷生活が待つてゐたに過ぎず、移民は塗炭の苦しみにあることが便船毎に傳へられたので日本政府としても捨て置けず、遂に上野景範を使節として派遣することになつた前後の事情がその**日記**により明かにされた、即ち明治二年七月十八日時の澤外務卿から小書生（現在の書記生）三輪甫一を隨伴して未だチヨンマゲ二本ざしの景範にこの奴隷移民救ひ出しのための渡布の命令があつたと記してあり出發は同年九月廿七日で外輪船ジヤパン號で横濱を出發してゐる、サンフランシスコに著いたのが翌十月十九日朝八時多數の出迎へをうけ祝砲と稱する巨きな砲數發を擧げ非常な歡迎で正に國賓待遇であつたとある

## 堂々と強談判
## 使命を果す
### まづ四十名解放さる

翌十一月三日サンフランシスコ出發の帆前船で同月廿四日布哇に著くと同時に國王カメハメハ第五世に謁見、更に宰臣ハルリス（總理大臣の意）と會見、邦人移民虐待の實情を述べ、希望者は即時歸國せしむるからと强談判し四十名を歸國せしむるとともに、堂々日本使節として殘りの移民の優遇方及び契約滿了の節は布哇政府の費用で送り屆けること、もし病氣にかゝりたる者ある場合は政府の費用で治療せしむることなど、ほか數項目にわたる條約を結び、同年十二月十七日前記歸國移民四十名を見送つた上で三日後の廿日再びサンフランシスコに向け出發、翌三年一月六日到著、米國における租税、關税をはじめ**鐵道**の狀況を具さに視察し殊に造幣廠を見學した際、日本の二分金がどしどし密輸入され米國貨幣に早替りしてゐることをみてびつくり、米國商人が一割五分の利を得てゐると聞かされ、歸國後は是非貨幣制

此のつゝき別にあり

榛原製

◎余の「随筆　頼山陽」を改版して永久のものとしたいと翰墨の好合の今村隆が望むので其意を汲みし此、実は此年今村は余の随筆三種出版した縁故もあるから許諾し此の如きもある、右につき余分振り此の書の最後の◎版本を出してみると、増訂の二字を冠し、昭和二年四月十日出しその前七版で目見が最後である、此書の創刊は大正十四年

三月十日ヨリ起テ大正十五年六月マデ六版ヲ出シ
タルニ非ズ自分ノ小本ヲ抜ケ出シテ
横訂版ノ本文六百九十一頁ニ目次ガ九頁ニ頼ラズ代ヲ
和田萬吉博士ノ文ガ十四頁附クテアルカラ七百頁
ハカリトナリマシタ。小本ノ二冊ヲ合セテ
四六版トスル計画デアルガ、北涯筆ヲ出ス
カラ後ノ山陽ノ遺墨ヲ折々ノ随筆ヲ収メレ
バ尚千ニ近ク、美ヲ尽シ精ヲ繰メテ附シ度イ
ト思ヒヲ訪ネテ見ルト、タノミ甲斐
ナク

春城漫筆中

頼山陽と男装の佳人　（こんな様ナ）
頼山陽朱柏廬ノ細香詩集（二七九）



春城漫筆

頼山陽と男装の佳人　内田魯庵
頼山陽ハ何ノ為ニ女ノ服ヲ代ヘ改服ノ終尾ニ附ス
附追ヲ新聞

春城随筆

頼山陽の遺墨（八八）

春城代作説

頼氏山陽の遺墨（三四九ー三六五）

（三〇）

山陽公に就て

ノ此分取ら

ず

之を附録として巻尾に附すること頁分相当千位

殊えるから、四六版ぐらゐ

随つて定価の安くなることといひしても得るに、未七版ぐ

まる三回の重版が附てゐるから。三冊五十銭位ゐ七

版ぐらゐまでが自分の著の望価のちやうどよ好

まるべ

阮刊の中から除くべきこと、木崎漢文の序、林伯

の跋を始めとして三村三冊三分の

其の事実相違も有るから刪去しない。巻頭の

言書も取捨とかく、何う

模原製

思ふてゐるがまだ着かつ

か捗がゆきます。

増補版の阮に附録七ちやうど更に附録

を添くるまで新の出版に就ての序七章

（一月十日記）

の不足を補ふ。

○岩波書店より「教育」に、教育

家としての修の修生」を書いてと頼んで来たが、自

分のやうな人にはとうてい断つたが、さりとて教育家

としての修の修生を誰かに書けば大抵

自分は書くことゝなると数の時間を要さ

人から断りつゞけが是迄ともに頼まれから、此ノ年一杯落

## 初詣總決算

# 明治神宮が筆頭

# 御賽錢廿餘萬圓

### 正月七日間の參詣二百萬人

### 神國日本の繪卷

明けてめでたや昭和十一年除夜の鐘の音をまち切れずどつと押し出された初詣での黒い人波で今年の正月もまさに神國日本の繪卷を遺憾なく繰ひろげた。

×

さて、松の内もすぎて、早春の瑞祥と景氣を獲得したものは誰？と考へてみると、これは曰くもろもろの御宮様に詣での人の足をはこんだ鐵道團体會社だつた子年だからといふのでもなからうが、今年の參詣者は例年よりもグンと増して、鼠算式神詣での人數は三倍乃至四倍の激増、したがつて福運獲得商賣繁昌の爲に社前に投げられた御賽錢、お守錢等々の清めの金高も、ハチ切れるばかりに多く人の數も三倍ならこれらも亦三倍の額にのぼつたといへ得よう、何にせ明朗なインフレ景氣のおめでたき具現ではあつた

帝都での初詣の人出は何といつても明治神宮が筆頭で、元旦の人出百五十萬、二日七十萬、松の内では三百萬人は下らないといふからお膝下の原宿驛がまつたく悲鳴をあげたのも尤で、二十餘萬圓にのぼる御賽錢は全てこれ國民の赤誠に依つたものであらう、人形町にある水天宮様の初詣は五日だつたが、この日二十二、三年振りで戌の日が重なつた爲初詣の人も今年は新記錄を生み平年の三倍餘で五十六萬、松の内も連日連夜二千、三千と賑つた何しろこゝは「安產」の御宮様だけにお神籤、お守りも疾風的に賣れお宮側の胸算段は適中して松の内の御收入は九萬五千圓に近いといはれてゐる

關東の一大靈場千葉の成田山も元日と二日だけの人出省線、京成電車による十二萬人の參詣者を加へて六十萬人、やはり平年の二倍乃至三倍の激増を見たがここは開運の御本山として護摩札、身替札合せて三十萬枚から賣れ、例年に徴して見ても十二三萬圓の御收入は確かだらう、尤もここは御本山よりも鐵道、附近の旅館、料理屋、飲食店、名物等に莫大な金が撒布されるさうだ

× ×

これ等の夥しい神詣の人の波、散錢雨の如しの風景はげに信仰國の日本ならでは見られぬ異風景だが散錢の儀禮は昔支那でも行はれてゐた、有名な韓退之の「佛骨之表」の中にも「百十群をなし衣を解き錢を散じ朝より暮に至る」などと出てゐる、日本では大昔はお初穂などといつて穀物に限られてゐたものだこれが金の世の中になると穀物から金銀にうつつて神前に奉る様になつたものである、それが散錢となり參詣者が願ひ事を書いた紙に錢を包んで奉ると神はこれに解答を與へて下さつたものだ、出羽の湯殿山大權現はこれで有名だが、湯殿山の麓に熱湯の湧き出る所があつて參詣者はこの熱湯に惜げもなく金錢を投げ入れるのである、俗に「金の清め」とはこの散錢の事をいつたのだらう、今の御賽錢は中世頃から始められその頃から賽錢箱ももろもろの神社佛閣に備へられた「寺々の奉加散錢は何のため臨終の誠の神佛を見たいといふではないか」これは享保のモード、ソングだつた、福運獲得、商賣繁昌の神詣は今も昔の人に變りなくイヤ榮えに榮えてゆくものらしい――。

---

膳

ある

一つ一つに臥龍膽の定紋つ

○

典を尊ぶ本山にこれは
し、台所専用のエレベータ
つて配膳能力を容易ならし

但し雲水の食事は朝はお粥
物と燒麩、晝は麥飯、味噌
の物、夜は朝と同じで徹底
粗食である

○

眼を以て觀ること莫れ、
以て念ふこと莫れ、一莖草、
に入りて大法輪を轉ぜよ…

…の開祖道元禪師の典座教訓に則つて料理の仕事をしてをりますぢや

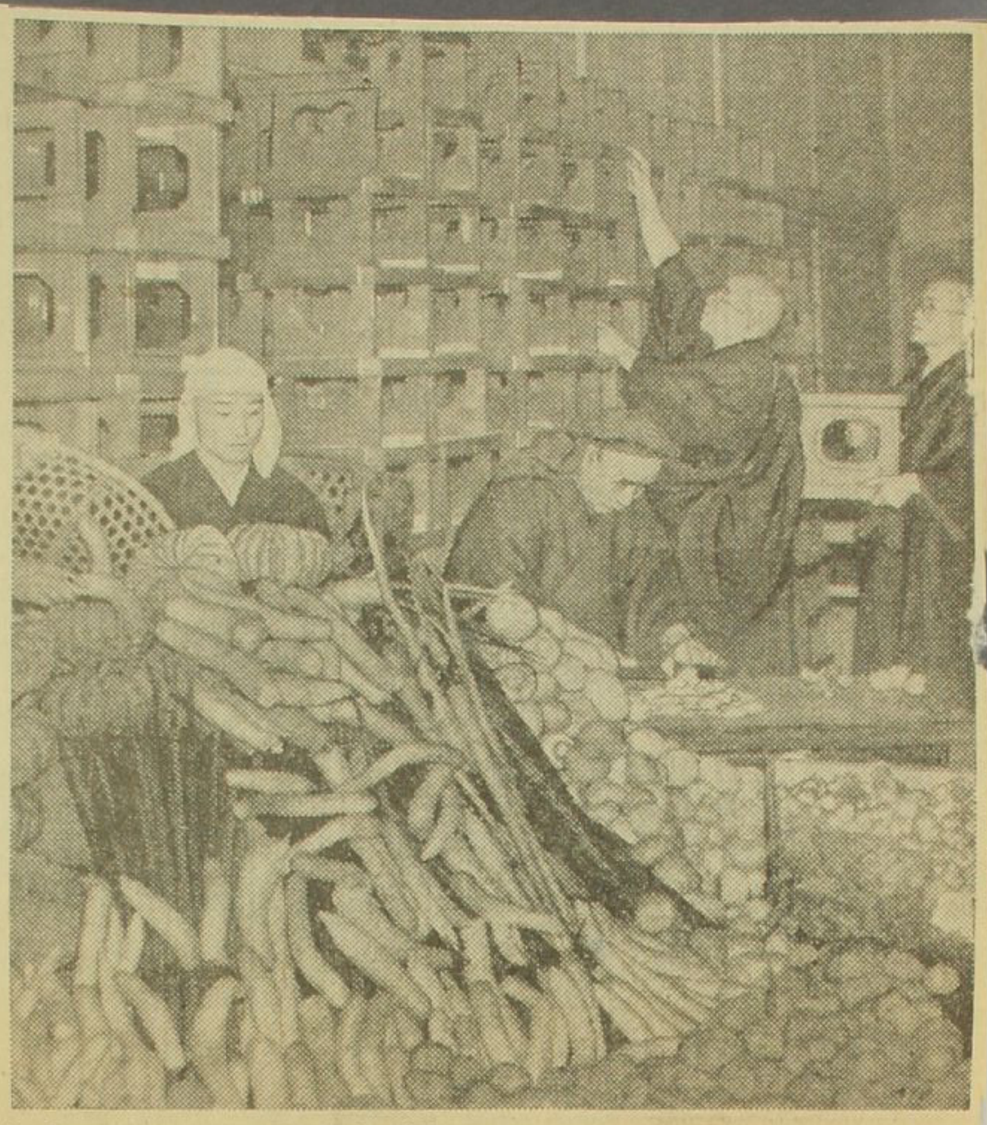
御開祖様は典座の職を賤しくせず尊ろより高く置かれ一碗の水、一莖草をも粗末にせぬことにおいて台所生活の中に坐禪唱題同様の信仰があると仰せられましたぢや、あなた達は當寺典座寮の設備の大きさのみに興味を感じてをられるやうぢやが貧しい伏家の一隅に取殘されてゐる彼の台所にも法悦の佛心が遍照、コックも女中も主婦も心構への如何では心の王國を建て得ることを特筆してほしいものぢや

加藤白照師は語り續ける「一粒一菜に佛の心」よし容れられずともこの精神での報告書だ、東方何うぢや喝【寫眞は永平寺の台所】

東京

---

これから、教育の資料としても大切なものである。自分も曾て
邦の従来における注意を拂つて、所感を録しておく



# 法城・近代式な設備

## 永平寺では忽ち二千の食膳

## 専用昇降機もある

## 東西讀物合戰 ⑩

【東】 慶自照師に先導されたのは禪家でいふ典座寮、吾等のいはゆる台所の合戰——大台所の東の出題に曹洞宗總本山永平寺の台所を登場せしめる、樹氷咲き亂れる眞冬の深山に一路、冬籠りの法城へ……

末寺一萬四千余、境域九萬一千九百余坪、僧侶二百が不斷の精進に法燈掲ぐ七堂伽藍一切が坊舍の底にあるかと思はれる午前四時、銅羅の響きに夢を破られ同山の講師として道心堅き加西よみ

【蒸】 ○氣裝置のモダン設備……四斗炊き、二斗五升炊き、一斗炊きなど計六つのお釜が一本の蒸氣パイプで一度に一石二斗五升の御飯を僅四十分で炊きあげるといふスピーデイな調食裝置は軍隊の炊事場も顔負けといつたところ

それもその筈だ、一ケ年の參詣人十萬人から十二萬、内二割が宿泊するのだから……

二百の雲水を擁する日本一の禪道場を賄ふ經費はこれら參詣人や宿泊者の寄進する志納金によつて生み出される、よつて勤行の莊嚴化は法城繁榮のため必然の勤勞、千五百もの參詣團體が一時に殺到してもビクともせぬといふ膳碗はみな堅牢な輪島塗りで總價額七萬五千圓だといふ、一つ一つに世龍體の定紋つきだ

【古】 ○典を尊ぶ本山にこれは驚くべし、台所專用のエレベーターがあつて配膳能力を容易ならしめる、但し雲水の食事は朝はお粥に香の物と饅頭、晝は麥飯、味噌汁、香の物、夜は朝と同じで徹底化した粗食である

【凡】 ○眼を以て觀ること莫れ、凡情を以て念ふこと莫れ、一莖草、一微塵に入りて大法輪を轉ぜよ……の開祖道元禪師の典座敎訓に則つて料理の仕事をしてをりますぢや

御開祖樣は典座の職を輕しくせず寧ろより高く置かれ一碗の水、一莖草をも粗末にせぬことにおいて台所生活の中に坐禪唱題同樣の信仰があると仰せられましたぢや、あなた達は當寺典座寮の設備の大きさのみに興味を感じてをられるやうぢやが貧しい伏家の一隅に取殘されてゐる彼の台所にも法悅の佛心が遍照、コックも女中も主婦も心構への如何では心の王國を建て得ることを特事してほしいものぢや

加藤自照師は語り續ける「一粒一菜に佛の心」よし容れられずともこの精神での報告書だ、東方何うぢや喝【寫眞は永平寺の台所】

東京

# 神國日本の繪巻

## 算決

明けてめでたや昭和十一年除夜の鐘の音をまち切れずどつと押し出された初詣での黒い人波で今年の正月もまさに神國日本の繪巻を遺憾なく繰ひろげた。

×

さて、松の内もすぎて、早春の瑞祥と景氣を獲得したものは誰？と考へてみると、これは曰くもろもろの御宮樣に詣での人の足をはこんだ鐵道團體會社だつた千年だからといふのでもなからうが、今年の參詣者は例年よりもグンと増して、最算式神詣での人數は三倍乃至四倍の激増、したがつて福運授得商賣繁昌の爲に社前に投げられた御賽錢、お守錢等々の清めの金高も、ハチ切れるばかりに多く人の數も三倍ならこれらも亦三倍の額にのぼつたといへ得よう、何にせ明朗なインフレ景氣のおめでたき具現ではあつた

帝都での初詣の人出は何といつても明治神宮が筆頭で、元旦の人出百五十萬、二日七十萬、松の内では三百萬人は下らないといふからお膝下の原宿驛がまつたく悲鳴をあげたのも尤で、二十餘萬圓にのぼる御賽錢は全てこれ國民の赤誠に依つたものであらう、人形町にある水天宮樣の初詣は五日だつたが、この日二十二、三年振りで戌の日が重なつた爲初詣の人も今年は新記錄を生み平年の三倍餘で五十六萬、松の内も連日連夜二千、三千と賑つた何しろこゝは「安産」の御宮樣だけにお神籤、お守りも疾風的に賣れお宮側の胸算段三萬圓の御收入は確かだ、尤もここは御本山よりも鐵道、附近の旅館、料理屋、飲食店、名物等に莫大な金が撒布されるさうだ

×　×

これ等の夥しい神詣の人の波、散錢雨の如しの風景はげに信仰國の日本ならでは見られぬ異風景だが散錢の儀禮は萱支那でも行はれてゐた、有名な韓退之の「佛骨之表」の中にも「百十辈をなし衣を解き錢を散じ朝より暮に至る」などと出てゐる、日本では大昔はお初穗などといつて穀物に限られてゐたが、今の御賽錢は中世頃から始められその頃から賽錢箱ももろ〳〵の神社佛閣に備へられた「寺々の奉加散錢は何のため臨終の誠の神佛を見たいといふではないか」これは享保のモード、ソングだつた、福運授得、商賣繁昌の神詣は今も昔の人に變りなくイヤ榮えに榮えてゆくものらしい——。

標原製

…これが実に多くの往来物を生ずるの基である。我が国古代の自分その相当後まで…ある。私はこれを自由で往来物などと呼ぶことを好む。

## 第一　往数

北向きの室、名越、いろは、千字文、三字経、節用集などを包含

## 第二　消息数

所謂る庭訓往来というべきもの、最古のものの…往来物の代表者として、古物を重要に数え…的衛往来が生まれ、更に多くなることを生ずる。往来物…

## 第三　訓育数

北数その動の…含及実語教、童子教、これに古くより…事から行われ、北条二書を経とする形と改…多く、往書を和解して九曲礼童子訓、庭訓往来などが生ずる。法令…その施政方針の根本素とする…消息文例が…消息詞が古く、文例と…特に女用として行われたものである。尚…

北数、今川…法令、女子教訓書を…

## 第四　歴史数

北部数ヶ所の古状掬を徴証の最古のものとす、多くの古状を寄す七古状掬があり、義経状、大内状等が古状に擬したるもの、偽記と思はるゝもの等往来と共に相伝来、柿三代往来、足利往来等がある

## 第五　地理数

複原製

統体の地理往来が多く明治に至るまで亡ること数百の数ある、中往来、谷地往来、回章か一分類をなす、又は施行往来、谷地往来、各地訪と分つもの

## 第六　実業数

元禄前後町人の往復上の地往来が多く、寛文頃の農事往来の数出で、寛文頃の農村衰退と日的とする農事往来出るに及び現代に至るまで農事往来等も出るに至る

成田の門前なる末七公書を
之を承けておるが、今寺社の
合さるべく、現在数も実業数
で、兎に角多くの往来物
辰一多くの数書が出来
が日ならん。成田門寺段の
の著書は上代及中世前期
僧俗が三割となって、公卿
ん、中世後期となると、著者の僧俗九割、公卿
お武家五分となって、王
とある。北の教科書も僧俗
んでおるが、寺子屋と





[redacted]学の普及
ようとし、の教育は寺と相
の児童の教育のみを低い程
体すら生来るものの
しめれ、見つつ北の国
のが書きのけてある
名がしらと江戸方角と村の名と
高麗往来 えんや浮山

ちとばかりにちくんばよう　七はやとお(十)

口さへあんが奉公に出よ

北辰坂上田村麻呂

うれしくもある。

○我邦の古くより日記が多くかゝれてゐるのは、世界有名の事である。天子より貴族に至るまで、日記を書かれたるものが甚だ多い。例へば、聖徳太子の天皇記、国記、推古天皇の天皇記、村上天皇の天暦御記、醍醐天皇の延喜御記、藤原道長の御堂関白記、右大臣小野宮実資の小右記、内大臣中山忠親の山槐記、左大臣藤原教長の台記などの如きは、皆当時の人が毎日毎年の事を公私共に書いたものである。其の他の法皇や女院や皇后などの日記も多くあつたことが知れてゐる。

○斯の如く日記は大切なものであるから、古人は日記を記すことに大切の心を用ひ、又之を相伝へることにも大切の心を用ひた。

○日記を記すことに大切の心を用ひたことは、古人の書き記したものを見ても知れる。古人の書き記したものを見ると、其の時間を重んじたことが分る。例へば、藤原実資の小右記の如きは、一日の事を一日の中に書き記したものである。

○日記を相伝へることに大切の心を用ひたことは、古人の書き記したものを見ても知れる。古人の書き記したものを見ると、其の相続人のみに伝へて他人には見せないやうにしてある。是は、日記の大切なる所以を知つて、他人をして之を悪用せしめないやうにしたのである。

複製

代がある。[illegible]の頭領のある[illegible]が眠一丁字
[illegible]うと云われてみる、[illegible]
の時参議を任じてみるが、玉葉によんごこの人の漢字
を知らなかったことがある。[illegible]
の任でえんと[illegible]藤原隆清も常年四十三[illegible]一丁字が
無かったとある。慈鎮和尚愚管抄[illegible]も
って特に[illegible]名の[illegible]
[illegible]ようにみえる。

○近ごろの[illegible]礼研[illegible]
[illegible]から、源平盛衰記[illegible]
[illegible]（巻四京中焼失の[illegible]）
神輿振[illegible]十禅[illegible]
[illegible]の[illegible]と矢を射立て奉

つとも小康を[illegible]、治承の武士成の兵衛尉[illegible]
の[illegible]、伊勢国[illegible]流罪の[illegible]
別れを惜んだ廿八のタ[illegible]
集会を[illegible]
つて甲[illegible]

「兵衛尉[illegible]
役立[illegible]、[illegible]
とて[illegible]
「穴面白や[illegible]
とて[illegible]
「大事の賊[illegible]
[illegible]者[illegible]

之を着し

とて腹かきものを卸し出すこと久し、そこで成田兵衛も

「穴甲斐の者ともや、帰り上つて又酒飲むとも書り難し、為成も為生さん」

とて自害しけるこそ、我一人生き残らん六波羅くづれ生さえ安穏ならまじと思ひ、家を

出をかけ、敵の中へ先入ると自殺しける。

北九州の大豪豪を好む者関白近衛公卿の

家を焼き、未曾有の大火と云ふもあり

○源氏物語を恋慕して唾棄した時代もあり

又、中世以来之れを文学の書として学ぶ者多し

源氏の作者紫式部の伝記を究めんとする

文化の

桐壺 蜻蛉 速翔 法性之雲 等末夜話 終期

況竹之花 厭空蝉 虚世 祝之顧 露命 浮

若葉雪曲 冷来橋花基址 合葬 生深草

早苗 梅枝 藤裏葉 若菜 柏木 横笛 鈴虫

夕霧 御法 幻 匂宮 紅梅 竹河 橋姫 椎本

総角 早蕨 宿木 東屋 浮舟 蜻蛉 手習

夢浮橋 (五十四帖名)

生死流浪之陥磨滅 一玉之四智円明之名誉

然而早蕨手習 為善臨終正念往生極楽之

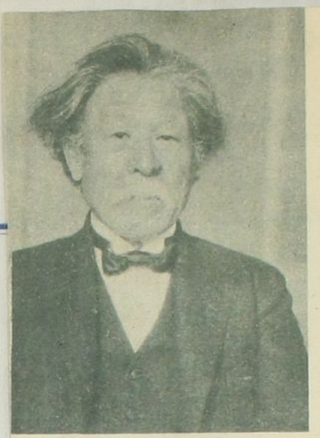
紅梅匂宮 想像聖衆来迎 梅檀沈水之香

之れを宝永年中に、甲府の長沢寺に

法のつれとする源氏物語の巻々を

を前提として初めて之の味をもつことを

文化の



理學博士

## 石川千代松先生略歷

**嘉延元年**　舊幕臣石川潮叟の次男として江戸本所龜澤町に生れ、後靜岡縣に移轉、十二歳の時本所に歸り伯父の塾遒文學社に入り英語を學び始む。**明治十二年**　東京大學入學、其前外語在學當時より英人フエントンに師事し蝶類を採集し十一年に日本産蝶の擬態につき發表。**明治十五年七月**　大學卒業理學士となる。明治十六年モールス教授の講演を骨子として日本最初の「動物進化論」を著す。**明治十八年**　獨逸留學、フライブルグ大學ワイスマン教授に師事し動物學・植物學・地質學を學ぶこと四年 Ph. D. の學位を得、ファ大助教授となり明治廿三年歸朝東京大學助教授となる。**明治廿三年**　東京帝大農科大學教授となる。**明治廿五年**　理學博士の學位を受く、在職廿七年。**大正元年**　帝國學士院會員に推され、學術研究會議に參與。**昭和十年一月十七日**　第十回日本學術協會大會に臨席、病を得て臺北病院にて逝去。享年七十六。

複原製

いれ、宮部から病状を聞くと、出番の時から
ご羅つとめとなるが、芸能着の上
ひとく男振して肺炎とそうろうと披つれ。
北日控席で初めて林住助氏外交と面し大変のよ
峰の紋服を借つとあるつ林はお国と分ってあつた時
石川さ並つれと話う、本人で教ゆる生うみ飯抱
国を記すを独の長う訴く行くと、狂い真今る飯
不独逸の総ものがあるが、石川氏が現れんるを急い狂
の様子が和うる記しみの変つれとう外
交で練つとうまい物子で笑いもれ。皆石川と田宮の
うの田中総管指、高の早着田中山宗と金と男人
姉席しが、会幸ま四人が席を並べるから互ひ

標原製

の涙笑しもおるしかの時の第一段が外国で或る毛蟹まれ
れんれ自の白い時経させてから田中正なは十三年猫
ひるみて、つくくこの洋料理いやうそう時まのみるう
日本料理を試みん。先うことかう或る也ことそうそう
が其の分後飲う来ると、自分が日本料理を心うを生し
喝采を博れこと多を話いんる料理をしんこうと云
あと、銀の箸筒を心の形のつとつきこ一箸を喫んれの或
時外国紳士もの方うれ日本料理をとりもの田中は普通の生まれ
針をさし、刀を神つてひき割んとうると皆後ろ
態度の変が少へんのでいき振り向くと、客とうう
てきた紳士の一人が已れの前へ来ておる。我我の先輩

を見て辛倒れば、かう智ういれの人の後を（ひとりて自分（田中）を呼ばれることをうと、田中さん文化的のお人と信してゐたれ人びすうとあれとある。田中いふ或る年の一月に餅を心らんとしがこんが好る雨倒であつたし米がうく支外米び日本の米を得ることが容易でそうとの論餅米をも絶為こそ入るめ、更らう困つたのの揚いて練ることもどうもしかれがうのか日本人同士であひなフふしれ飯を骨を折つて一を潰して餅ら しくしんともありうれとこ笑しとも。私の餅屋さる総会興作を知るのて工芸寮のことをあから、但会うと聞めから、四年方の同級であつたと云ふ。真の処も私の人とうふ関係がありると、すくいう自分の記憶

びあることも出来ない。此の年五四五の演説がありたが自分共こ年形らしい旅のうそうとうと。石川自身も古いとよう石川の父は田舎を出で勝女であつたと聞くも、石川の新とは市立第一女学校の漢文的の深切の人びあつた、係し青生時代は逸会任ずず外国教師の無礼を怒めなり。帝大の教授を罵倒する時は年御を潮流のくれのの通りで硬骨の実がそくれのの通りであつたとう。いと（此の事は後年伊勢出身）の話し合うと終る庭迄をおうそうれ住び、其の話し振りは物快び溜らないとこの人柄がそうかお風であつたの人の牧師

まい訓戒といふ、とにかくこれは政府の忌諱に
觸れて、彼等は免官されると云ふ大紛擾を醸さんが
ためにこれと云ふ面倒が起つて、当時其の報告中にも国
印と依田や岡山とが其辛の末、矢野お辞
めとこの始末を書いて翰林に書いたのは
第一の二家が脱したのであると云ふ正説を出
させてどうやら事済きを得たのを田中氏を評
つ此外に当時政府が其の局の撰に對する態度
はこれで想像される。田中氏や石川の名が当時
の数多名誉に無いのはこれが故である。田中氏
は大隈英麿の旧藩臣である関係から早く英
學校去ったと馳せ参じたのであることを記

九〇

〇御木本が真珠培養に成功してから真珠趣味が
大いに廣まると共に、猫も杓子も真珠を欲しがるや
うになり、其の品質の下ることは格別價も高からぬ
所から、料理屋などでは貝の肉にこれを狀して
出し、客を喜ばせる趣向と供してゐるが、現に此の紅
葉館などもこれをやつてゐる。自然に其の貝に附着してゐる
るのでなく、特に入れるのであるから、どの貝にも見えず
ないで、客は不公平に思ふが、未だ真珠のあることを
客に知らさぬ所から、客の注意して真珠を噛んで砕く
こともあつて、此のためにこれをやつた人もある。斯ることは
今の書き珍らしいが、つまり藝者や雛妓を喜ばせた

寒の夜賦ひとつ
の三十銭位と考へる

寒の夜賦ひとつあるが、真珠の味い偉う

寒の夜を笑ふ為め
梅瀬日年と嘯き刻せしもの
昭和十一年一月十七日
石邨

○寒梅の蕾あがりて大蕾未蕾がある寒さ
徹処上座を占りをみること、蕾ある者が何う書いてもさうと
新のので宜いと流布やうそお宝で現きまうそれ
ち来たのは、ぬくもりの春ねしてのる禅ひあつた、流石
まをこれ木堂比、筆をを揮つた印也「爾雪生春」の
四字を大書したのでいた、婦と顔まをしたと伝へる。
該かである。

○三村休洗氏秋山玉山の左の動作を示さる
玉山の人物を賜する春宵秋の長夜の
ふ処此詩の如きを見る所、あの乾後の大偉も要
おくるのからもの
狗交歌

衛鈔狗吠傳何急、春人白金歡期、虫白低頭
牡蠣誓、却似鬼豹酒時、玉壺終的酔
醉盛、銀瓶半呑、珊瑚枝、漸入佳境歓応熟
為身相皆転相、機、二轆轤連、揺、南鄙八
足状愈、一癡児抱杖、駆不去、鶺蜂因持欲
放遅、公子馬立倫眼易、佳人鞦中含羞之、彼
北邙山、雖大好、百年退惟極不能駐、幸因傷
人灌盆、雪花数条、雛
○此花の推因（菜次ぬりえ）是が時代もの
の仕巻と二巻の納めるもの悩もの、不思儀ろくろい
嘉き日のこと、鈿細工にて十五の乳を宝す

孔の雨を浮視する蓮花
と流れの蒔絵なり、紐通し
の金具も獨鈷つるぎとも云
ふべきおもろき云伝へる
ところ、十五個の乳の何人の為めのものか
明らかにしがたし、乳の数の井上都当
侯の御のよく、あはくとも云ふ。
○元御里御後乳の前幕一面鳥兎試の模様と
侯る御後野史漸やく御里と於て生的なんとも
形ちなきを集めたもの、北の山百二十冊目共淡斎の
あを以て（一月十八日）

用意の地誌を得たりと誰もが謂うことの実に容易ならざるの今の想像もつかるるの八困難
かるるのである。一例を挙げんに大日本地名辞典を編纂する時の寄地誌の材料
が大日本地名辞典を編纂する時の寄地誌の材料
著者の如き九州二三の国々あつたがお
遥時代各藩が領土内の事を調べ出すが如き地誌の主旨を誤まり
候果地誌の主旨を誤まり、土佐の如き秩序整然たる郡誌を
出されたのみならず南部
出されたのみならず南部、秋田の如きその大部の寫本が
あるも遂にそうした時代の偽士ハ之を見るの可
きを見ず雖儀をしたことを自慢し出すが、仙台藩史こそ
も著述が仙台藩士鈴木内の事を記するに
も相当の骨を折れたことと想像さるるが、実さえよ

東京製

り比困難を感じたことと、上杉氏の史料を蒐
集したること。仙台の大部の文献へ上杉氏の援するもの
殊に多いからである。上杉氏の移封と共に特に
入れたものが多く、寺宮の文書を始め仙台のそうした
缺き難いもの多く、寺宮の文書を始め仙台のそうした
の前に言わんやや、若干の文書うる督制があるも、鈴内の文
献を焼失を出すを許さず、仙台後世の著者の参
酌を経た津々浦々迄をくまなく完
備の為めに、欲を
数年を要した位も、若干の誌料を蒐集し得た
ことである。こんな著者の手許にも多くの文献
許りで、当時の苦心は真に涙くましいものがある。今

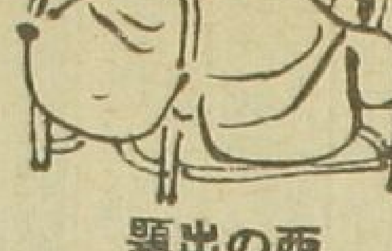
對して感謝の念が起る、若しどこの府縣にも君の如き文藻
ある寡かな人がゐて、常に郷土を指導してくれたら、其の郷土は
どんなに仕合であらうかと。
私は郷土史誌を特に高調するのは、絶対富豪の家から
相当の学者が帰休して、其の財のある郷里で
研磨して優遊何事にもわずらはされない人が、或は於
郷里を全く閑却して、西洋研究に身を投じ熱心な
どの設計をするやうな人は、私は決して非難しない
が、故郷に踏み止まる事を笑ふ人でいるの。西洋研究や
洋書を読むのは、都会でやつて貰ふ事が及ぶの。唯地
方研究と其の郷土誌は、是非其土地に感ある且つ相当の
郷土誌力のある人を待たねばならんが、これは相馬君の

やうな人がなければならぬゆゑんでもある。
郷土に来住する人は、敢て少なくないが、恐らく君の郷土の土となるのであらう相馬君のやう
に一体二十年も住ふ人はない。斯の如き人で始めて郷土
の研究も出来るのである。君が此の二十年間に於
何ぞ郷土の心田を開拓したか。文献が
埋もれて隠れた人が出たを甦らし、埋れた埋没材が君と
俳句の香を芳しくしたか、君の相手は郷里の人で、君の業に
する材料は郷土のみである。君は往々材料に窮して、動
もすれば隠れた方面に新しき材料を探くる。ここの松を他
人がうっかり採り得ない事、採り得る物をとうとう得ないといふ
君の立派な磨き上げた立派なものとする。君の在郷二十
年の間で、吾郷土の史物を得られようとしたのもあるかを知る

# 患者は"閻魔

## 佛像病院

變つた病院



西の出題

——ア、、モシモシ……明珍です、なに閻魔さんのお腹が傷んだ?そいつは大變、ハイハイ……直ぐ往診に出かけます

お醫者さんにもいろ〳〵御座んす氣の早え關東のお方、これなんど山の神の太鼓腹がパンクしかけて泡を喰つた御亭主から掛かつた電話と早合點しては困ります

もう一遍いはして貰ひませう

病院にもいろ〳〵ありま

して、わが愛すべき明珍さ醫者並に取扱つては眼に角フンガイするです、"明珍

——詳しくいへば明珍恒男奈良市法蓮町の住人で東學校の出身、本年とつて五歳、どんな難かしい外であれ、若返り法であれいやしくも佛像に關するるピンからキリまで診療〇いふ日本に二つとない佛の院長さんです

文部省囑託の肩書で『國佛像に限り往診可仕候』とだから凄じい

ます。

今度君の紀念出版六冊に收める所は專ら二十年間の折りに觸れての感想であると、良寛一茶の如き一部を為すものを除かすとあるが、こんな私の意を述べて居る、隨時の所感録こそ君の愛郷心の發露であり、君ならでは書き難く又之は難いものである、君の二十年の~~月~~間の在郷は、~~一種~~あるもの~~而も~~他人の想像し得ない感慨の深いものがあらう。應於て似れことき生活を敢て不平もなく、静かに農生の為めに尽し切った私の城後人として感謝を捧げ得ない。此の二種は艱辛と出きあつたら人から青きて互して相馬と寄せ地、此の下書は抹殺すべし

榛原製

# 患者は〝閻魔大王〟

## 佛像病院長　明珍さん

東西讀物合戰 ⑲

變つた病院

題出の西

――ア、、モシモシ……明珍です、なに閻魔さんのお腹が傷んだ？そいつは大變、ハイハイ……直ぐ往診に出かけますお醫者さんにもいろ〳〵御座んす氣の早い關東のお方、これなんど山の神の太鼓腹がパンクしかけて泡を喰つた御亭主から掛かつた電話と早合點しては困ります

も　一遍いはして貰ひませうう　病院にもいろ〳〵ありまして、わが愛すべき明珍さんを數醫者並に取扱つては眼に角たてゝフンガイするです、〝明珍さん〟――詳しくいへば明珍恒男氏奈良市法蓮町の住人で東京美術學校の出身、本年とつて五十と五歳、どんな難かしい外科手術であれ、若返り法であれ、こといやしくも佛像に關する限りはピンからキリまで診療O・Kといふ日本に二つとない佛像病院の院長さんです

文部省囑託の肩書で「國寶指定の佛像に限り往診可仕候」といふんだから愛じい

**奈良**　縣生駒郡都跡村は南都七大寺の一に數へられる唐招提寺の講堂にもぐりこんでゐるのを訪れますと……乾漆盧遮那佛千手觀音、大日如來――かうしたとつ、もなく老長しきつた天平時代の佛者さんを相手に悠々コツ〳〵、コツ〳〵小槌の手が動いてゐるのです、さて話は再び閻魔さんに戻りますが、明珍院長の弁

いろ〳〵閻魔も手掛けたがネ、鎌倉圓應寺の運慶作と傳へられる閻魔大王も天災地變にはトント睨みが利かなくなつたとみえあの大震災當時五體をバラバラ……見るも無殘にペシヤンコにへしやげてしまひS・O・Sを發してきた時はちよつと愉快だつたネ、人間サマが死んだ閻魔大王を生かす……このためにあのエンマの舌もみんごと引拔いてやつた、アツハツハ……ボクが死んでたとひ地獄へ墮ちたつて肝腎の閻魔君がボクには頭が上らんサ

**浮世**　にあの世の佛さん運中から肝やかりそめにも〝先生〟と敬はれる果報者がこの院長さんを除いていつたい幾人あるでせう？　現在わが國で、國寶に指定されてゐる主だつた佛像は約三千體位だがこの明珍さんたるや實に明治卅六年以來コツコツ全國各地を經めぐり歩いて、このうち診療ならびに施療に應じたもの無慮二千五百體即ち九割いつたい佛さんにも起死回生のコツつてものがあるんですか

と訊くと〝いやあ〳〵とつるり顎を撫でつゝ

ウンまあ、あるといへばあるネ佛さんの嚴密な姿態のサンプルは弘法以後「儀軌」に規定されてゐるんだ、もと〳〵佛さんを拜む規範を書いたものだが、つまりまあこれを研究すりや自然に判るのさ、しかし奥義といふ奴はやつぱり口傳だそんじよそこらをいふネ、あつたよ、あつたよ、ハツハツハ……白狀するがネ實は藏倉鶴ケ岡八幡の弁財天に億れたのサ、むろん最初は國寶ぢやなかつた、そいつにこのボクが妙に氣が惹かれてさ、とう〳〵着物をめくつて裸にさして貰つてさ、すつかり美しくお化粧の仕直しをしたんだよ、素晴らしい肉體だつたネ、だから手術も一世一代精根こめてやつたし、その上藏置料一切までも寄付してしまつたよ、そのお蔭か知らんが、この弁天さん、間もなく國寶になつたんだ】

**二十一**　三人もお弟子さんを使つて、いつたい藏置料はいかほど……と水を向けると最近ではまあ京都の三十三間堂の御本尊の修理――こいつは三十三化身揃つた立派なものだけにザツと九千圓位頂戴したよ、ことしはさらに伊賀常福寺の五大明王や同じく三十三間堂の長持に護摩とある手足、胴體バラ〳〵の千手觀音を一つ〳〵……コツ〳〵直しにかゝらねばならんし、いやもう忙しくつてかういつてゐるうちに、はや一昨秋の風水害でぶつ壞れたこゝの末寺の一つ男山法圓寺のお釋迦さんの首がどうやら一人前にすげ上つてしまひました【寫眞は佛像手術中】

○軍法会議の判決が或る程度迄外交の行詰りを打開する為めに利用されたことは、日本の主張を通した様でハあるが、一面に於ては、日本の主張を通すことの困難なことを表白したものとも見ることが出来る。小村が日露戦後の挽回ともいふべき大使として、何も彼も利益を獲ようと思ひ、国民が期待したにも拘らず、僅かに償金を棄てゝ償金を得ず、樺太の半分を得たに過ぎないことを見ても、日本も可なり外交の行詰りに苦しんだことが分る。而して今回の軍法会議の判決が、如何に外交の行詰りを打開する為めに利用されたかは、あえて説明を要しないであらう。

○軍法会議の判決を以て、日本が敗戦の結果、露国の勢力が満洲から全く駆逐されたものと思ひ込んだ露国人が、日本を侮り、日本人を虐待するやうになつては、日本の内部は無論、列国の為めにも容易ならざる事態を惹起するに至るであらう。やり直すべき時であるから、やり直すべきである。

○軍法会議の判決は、露国の使臣が、いつまでも滞在して事情が通じ（外交の行詰りを打開する為めに利用されたことは、日本の主張を通したものとも見ることが出来る。小村が日露戦後の挽回ともいふべき大使として、何も彼も利益を獲ようと思ひ、国民が期待したにも拘らず、僅かに償金を棄てゝ償金を得ず、樺太の半分を得たに過ぎないことを見ても、日本も可なり外交の行詰りに苦しんだことが分る。而して今回の軍法会議の判決が、如何に外交の行詰りを打開する為めに利用されたかは、あえて説明を要しないであらう。

○軍法会議の判決を以て、日本が敗戦の結果、露国の勢力が満洲から全く駆逐されたものと思ひ込んだ露国人が、日本を侮り、日本人を虐待するやうになつては、日本の内部は無論、列国の為めにも容易ならざる事態を惹起するに至るであらう。やり直すべき時であるから、やり直すべきである。

○軍法会議の判決は、露国の使臣がいつまでも滞在して事情が通じ（外交の行詰りを打開する為めに利用されたことは、日本の主張を通したものとも見ることが出来る。小村が日露戦後の挽回ともいふべき大使として、何も彼も利益を獲ようと思ひ、国民が期待したにも拘らず、僅かに償金を棄てゝ償金を得ず、樺太の半分を得たに過ぎないことを見ても、日本も可なり外交の行詰りに苦しんだことが分る。而して今回の軍法会議の判決が、如何に外交の行詰りを打開する為めに利用されたかは、あえて説明を要しないであらう。

○軍法会議の判決を以て、日本が敗戦の結果、露国の勢力が満洲から全く駆逐されたものと思ひ込んだ露国人が、日本を侮り、日本人を虐待するやうになつては、日本の内部は無論、列国の為めにも容易ならざる事態を惹起するに至るであらう。やり直すべき時であるから、やり直すべきである。

民も深く其国際的主旨を理解して来れるが、衆議院の決議に、議会の協賛を経るものゝ、即ち論なきも、世界の向つ
ての祝砲の響を聴かするやうにも感ずる。日本も又この国際條約の下に立つ
ことがある以次第條約改正に到ることを叫ばれることを思ふと、軍備に関しても四国の実施に再び不満の條
約を改正せんとの叫びやうとするが、特に五国が守備を
他国から制限さるゝやうな点は、その四国の思ひ得ざる所である。
之を思ひ得ざるまゝ、降務條約も忍び得らるゝ筈
であるが、わが帝国の條約を締結したのは、日本の興味的と
称せられるやうな、今世界の大国たる位
置をも占めるやうな、勢力を有する国と認められる
時を待つたのである。

（一月廿一日記）

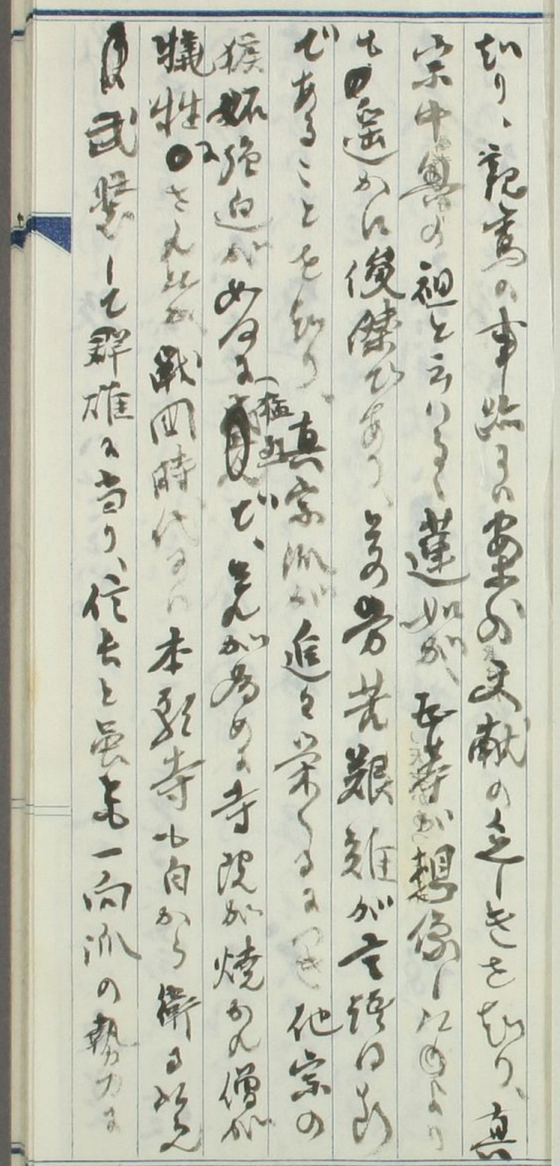
## 二三日

二三日は寒の内の暖かい日であつた。午後から
散歩に出掛けた。雪の未だ高峰の
頂に輝いて居るのを見る。日光の男体山も
うつすらと雪を被つて居る。田畑の緑は
すつかり枯れてしまつて、白々とした
ものである。此の本乗寺の庭の
樹木も、皆葉を落して、寒さうに
立つて居る。

（一月廿二日記）

先瑞と光清とも切り、西本願寺を度々訪ねたこともあり、西善寺の西本願寺の西派本山の事
大洲侯を介して京都の寺々招えたこともあり、其後招魂
寺院を設立したこともあり、畢竟の大念の善望善集
る寺から金を出さやうとしたこともあり、俗的関係の如き
深厚の由にて、終いに乳癌の教を仰ぐ訪ぐんと
こともそうそう、遠地の事故そうと討ねたこともそうそう
とつけふつつけし程その事が
そうそう種々の俗説を交つて判別もつかぬ、終の来
峰の本願寺抔を頂き寄
て後四人始めて今のことをみる
如何に本願寺の現在が祖師の思いと異つてゐるかを

複原製



# "解散"時代色濃厚 茲に十五回

## 第一議會

松隈内閣、明治廿年十二月廿五日、會議中＝理由＝政府の施政は進歩的な宣言に反して外交は布哇問題、支那問題に措置を誤つたと大隈伯を初め進歩黨出身のものが前次辭職し去り民黨聯合して内閣不信任案を提出すべく骨頭議事日程を變更し、鈴木重遠氏が代表として政治百出、財政紊亂、民心離反の不信任案を提出決議せんとしたによる

## 第二議會

第三次伊藤内閣、明治廿一年六月十日議會散會後＝理由＝政府は歳出の膨脹を地租、所得稅、酒造稅などの增徵及び鐵道信收入の增加案によつて補塡すべく增稅案を提出し衆議院は多數をもつてこれを否決したによる

## 第十一議會

松隈内閣、明治廿年十二月廿五日、會議中＝理由＝政府の施政は進歩的な宣言に反して外交は布哇問題、支那問題に措置を誤つたと大隈伯を初め進歩黨出身のものが前次辭職し去り民黨聯合して内閣不信任案を提出すべく骨頭議事日程を變更し、鈴木重遠氏が代表として政治百出、財政紊亂、民心離反の不信任案を提出決議せんとしたによる

## 第十二議會

第三次伊藤内閣、明治廿一年六月十日議會散會後＝理由＝政府は歳出の膨脹を地租、所得稅、酒造稅などの增徵及び鐵道信收入の增加案によつて補塡すべく增稅案を提出し衆議院は多數をもつてこれを否決したによる

## 第十七議會

第一次桂内閣、明治卅五年十二月廿八日、會議中＝理由＝北清事變の情勢に鑑み政府は國防計畫を立て明治卅六年度から四十六年度までの繼續事業として八萬トンの海軍擴張に要する九千九百八十余萬圓の財源を特別地租增徵五ケ年限を撤廢して永久稅に替へんとし貴衆兩院に於て孤立無援に陷り衆議院に提出した地租增徵繼續案が否決されたによる

## 第十九議會

第一次桂内閣、明治卅六年十二月十一日＝理由＝衆議院議長河野廣中氏が院議に付された政府の内外失政彈劾の奉答文中に先例を破つて自らの「内政は彌縫を事とし外交は機宜を失し」の句を起草し彈劾的奉答文を各派の内議を經すして直ちに正式會議に付し、彈劾上奏の意を表明したによる

## 第卅五議會

大隈内閣、大正三年十二月廿五日會議中＝理由＝政府が歐洲大戰の國際情勢に鑑み二ケ師團增設案、製艦費その他新規事業費を提出したに對し政友會と民政黨は相携へてこれが豫算を削除したため衆議院の多數は國政を政爭の犧牲となせりといふにあつた

## 第卅八議會

寺内内閣、大正六年一月廿五日、會議中＝理由＝大隈内閣の後を受けた寺内内閣が余りに官僚内閣だとあつてこれに刺戟された野黨三派が合同して憲政會を立黨し國民黨と結んで超然内閣不信任案を提出多數で可決せんとしたによる

## 第四十二議會

原内閣、大正九年二月廿六日、會議中＝理由＝憲政會の尾崎行雄、島田三郎等が普選を提唱し時期尚早說の加藤總裁と對立したが結局黨議として國民黨と共にそれ〳〵普選案を提出、政友會はこれに反對を表明したので普選法案は否決される運命にあつたことは明確であつたに拘らず原首相は普選を民意に問ふとの理由で解散を斷行した

## 第四十八議會

清浦内閣、大正十三年一月廿一日休憩中＝理由＝山本内閣の後を承け大命を拜した清浦内閣は貴族院の四派より成り、これに刺戟された憲政政友、革新の所謂護憲三派は合同して猛烈な護憲運動を開始したが政友會では護憲運動反對の山本達雄、床次竹二郎、元田肇

## 第五十議會

犬養内閣、昭和七年二月廿二日會議中＝理由＝政府は金輸出再禁止問題を初め重要政策が根本において民政黨と相容れず、而も少數の與黨を以てしては到底圓滿なる政策の遂行が不可能であるから信を國民に問ふとの理由によつたものである

## 第五十七議會

濱口内閣、昭和五年一月廿一日、會議中＝理由＝政府は衆議院で少數黨の民政黨を基礎とし政友會は絶對多數を擁してゐるため諸般の國策を遂行するに故障多く政局を不安定の狀態におくとは國家のため憂慮される、殊に總選擧によらずして獲得した不自然の絶對多數は國民總意に非ずといふにあつた

## 第六十議會

犬養内閣、昭和七年二月廿二日會議中＝理由＝政府は金輸出再禁止問題を初め重要政策が根本において民政黨と相容れず、而も少數の與黨を以てしては到底圓滿なる政策の遂行が不可能であるから信を國民に問ふとの理由によつたものである

憲政布かれて皇和を經ることここに四十六年、議會を迎へること今年で六十八回、衆議院議員の總選擧が行はれること今回の解散で十九回目となる、明治廿三年帝國議會が創設されて以來事に四年間の任期滿了したのは明治廿一年から卅五年、同卅七年から四十一年、同四十一年から四十五年の三回だけに止まり、その他は任期半ばにして衆議院は解散され岡田内閣の解散を加へると十五回の解散地震である、こゝに解散理由と年度とを擧げ帝國議會解散史を概觀すれば左の如くである

**第二議會**　松方内閣、明治廿四年十二月廿五日、議會散會後＝理由＝政府の施政は進歩的な宣言に反して外交は布哇問題、支那問題に措置を誤つたと大隈伯を初め進歩黨出身のものが前次辭職し去り民黨聯合して内閣不信任案を提出すべく骨頭議事日程を變更し、鈴木重遠氏が代表として政治百出、財政紊亂、民心離反の不信任案を提出決議せんとしたによる

**第三議會**　第一次桂内閣、明治卅五年十二月廿八日、會議中＝理由＝北清事變の情勢に鑑み政府は國防計畫を立て明治卅六年度から四十六年度までの繼續事業として八萬トンの海軍擴張に要する九千九百八十余萬圓の財源を特別地租增徵五ケ年限を撤廢して永久稅に替へんとし貴衆兩院に於て孤立無援に陷り衆議院に提出した地租增徵繼續案が否決されたによる

**第五議會**　第二次伊藤内閣、明治廿六年十二月廿日、議會停會中＝理由＝水雷砲艦千島を佛國造船所に依託建造し竣工の上回航、瀨戸内海で英國船と衝突沈沒したいはゆる千島艦事件に對して紛擾すると共に官紀振肅の彈劾をなし政府の方針に反對する條約勵行建議案を議決したによる

**第六議會**　第二次伊藤内閣、明治廿七年六月二日、會議中＝理由＝政府が前議會で衆議院の意思表示をしない前に解散理由を公表しなかつたのは立憲的行爲でなく不當の解散をなしたとて百四十四で否決となり遂に民黨は官紀振肅、政費節減、海軍改革などの内政問題を捉へて上奏案を提出し百三十九對百五十三で上奏案が可決されたによる

**第十議會**　第一次桂内閣、明治廿五年十二月廿八日、會議中＝理由＝北清事變の情勢に鑑み政府は國防計畫を立て明治卅六年度から四十六年度までの繼續事業として八萬トンの海軍擴張に要する九千九百八十余萬圓の財源を特別地租增徵五ケ年限を撤廢して永久稅に替へんとし貴衆兩院に於て孤立無援に陷り衆議院に提出した地租增徵繼續案が否決されたによる

**第十九議會**　第一次桂内閣、明治卅六年十二月十一日＝理由＝衆議院議長河野廣中氏が院議に付された政府の内外失政彈劾の奉答文中に先例を破つて自らの「内政は彌縫を事とし外交は機宜を失し」の句を起草し彈劾的奉答文を各派の内議を經すして直ちに正式會議に付し、彈劾上奏の意を表明したによる

**第卅五議會**　大隈内閣、大正三年十二月廿五日會議中＝理由＝政府が歐洲大戰の國際情勢に鑑み二ケ師團增設案、製艦費その他新規事業費を提出したに對し政友會と民政黨は相携へてこれが豫算を削除したため衆議院の多數は國政を政爭の犧牲となせりといふにあつた

**第卅八議會**　寺内内閣、大正六年一月廿五日、會議中＝理由＝大隈内閣の後を受けた寺内内閣が余りに官僚内閣だとあつてこれに刺戟された野黨三派が合同して憲政會を立黨し國民黨と結んで超然内閣不信任案を提出多數で可決せんとしたによる

**第四十二議會**　原内閣、大正九年二月廿六日、會議中＝理由＝憲政會の尾崎行雄、島田三郎等が普選を提唱し時期尚早說の加藤總裁と對立したが結局黨議として國民黨と共にそれ〳〵普選案を提出、政友會はこれに反對を表明したので普選法案は否決される運命にあつたことは明確であつたに拘らず原首相は普選を民意に問ふとの理由で解散を斷行した

**第四十八議會**　清浦内閣、大正十三年一月廿一日休憩中＝理由＝山本内閣の後を承け大命を拜した清浦内閣は貴族院の四派より成り、これに刺戟された憲政政友、革新の所謂護憲三派は合同して猛烈な護憲運動を開始したが政友會では護憲運動反對の山本達雄、床次竹二郎、元田肇、河野廣中、犬養毅氏等が内閣不信任の決議を上程したが何等反響を起さず、大井憲太郎氏外九名は條約改訂問題その他を一括して上奏案を提出し百四十九對

**第五十議會**　犬養内閣、昭和七年二月廿二日會議中＝理由＝政府は金輸出再禁止問題を初め重要政策が根本において民政黨と相容れず、而も少數の與黨を以てしては到底圓滿なる政策の遂行が不可能であるから信を國民に問ふとの理由によつたものである

**第五十七議會**　濱口内閣、昭和五年一月廿一日、會議中＝理由＝政府は衆議院で少數黨の民政黨を基礎とし政友會は絶對多數を擁してゐるため諸般の國策を遂行するに故障多く政局を不安定の狀態におくとは國家のため憂慮される、殊に總選擧によらずして獲得した不自然の絶對多數は國民總意に非ずといふにあつた

**第六十議會**　犬養内閣、昭和七年二月廿二日會議中＝理由＝政府は金輸出再禁止問題を初め重要政策が根本において民政黨と相容れず、而も少數の與黨を以てしては到底圓滿なる政策の遂行が不可能であるから信を國民に問ふとの理由によつたものである

複製

○篆刻 印刻のことである。印の模様篆字を彫ること。篆刻と言う印刻と言う意味である。印は金石印数に限るが他の金石の板状木材ガラス類の最も広いものへも印刻することがある。印の形が甚だ小さい。大抵一二寸四方大きいのもあるが、これが他の金石と共に文字の数の多少を問わず秦漢時代の印が今も残っているのは、印刻の発達を遂げたものである。印刻は漢時代のものが最も優れ、北の石の時代のものが漢家が今日手本としてみるのである。北の金石の形が小さく重厚篆の如く及び難しとしてみるのである。

未だ印刻の上に置き文房と伍せしむることを出来るのである。

複原製

最も大切味があるのである。官印は天下を統合し私印は自家の所有権を確保する為め、官名や姓名や家名やらを刻するのである。国璽や皇帝の璽王の璽とうくばり白圭家伝国の璽などは、皆一人の無二の印である。我邦の研会の如きは、皆一人の無二の印と見るべきものである。皆人皆家の璽として用いる時は権威に欠けることもあるから、古来印を刻するに特別の注意を払い他の金石の文に比べて刻せらるるが、印は最大さがかかる故に書家人に依っては篆書の筆者が自ら彫るものもある。秦漢時代の印の最も優れたものの印が書道を専らとした人の手で刻せられたものである。

かく浅世のごとく印刻の特徴飾りの無いから保し帝王の璽ハ

権威を現す為め堂々たる体裁を具し、百官将侯共位地に依り正服をまとわれるあり、印の装飾と云い名刀の自刎あるのみか、日毒ら銅章を用いられ鈕の如き鏡剤八種も獣類の形のごとく、麒麟、辟邪、虎、馬、羊、兎、蟾蜍、蓮華のごとくなるが多かりしが、楷鈕、連珠鈕、雷鈕の如き後世のごとき印の主力を義刻に置きたるは多様の鈕を以て多様の趣味が織成されいるし秦漢の印の趣味が後代に於ても長く停滞して六朝から唐宋元の印を経て殷ども変刻が跡を絶えるべきものが無かった。宋元あたりの印の支那の古里土臭く見ることが出来ず、篆体は尚ほも支配と、印我の牙

榛原製

や角や瓷や漆木等もとより用いられ、田形、瓢形、異形なるとの輪廓が出来ないと甚だ俗化したが、日本の徳川の北渓の印の大抵の印の大抵の印判屋の刻と同じ時代の趙子昂の如きと書の名家が出でて、自から印を刻ると云う説と、但し同一元代の末期に受石を始めて名を彫したと云う説とあるが、元来元章が書[illegible]の名手をもって刻を試みたるが如きは一革命と云うべく、石は金石の属と同じく、士大夫や文人の自から刀を握るやうになったのは、ここ[illegible]

複製

昭和十一年一月二十五日　（第三種郵便物認可）

# 藝妓や映畫女優の
# 豆撒き罷成らぬ

## 豪華な年中行事狂騒曲に
## 文部省の「宗教肅正」

来る二月四日の節分をひかえて帝都吉例の「モダン豆撒き」の祭典が文部當局の「宗教肅正」の鐵玉に上り「映畫女優や藝者、レビュー・ガールの出演は絶對罷りならぬ」ときついお達しで豪華な狂騒色を極め消す事になつた――帝都の年中行事として賑やかな節分の「豆撒き」は最近、すつかり興行化して成田不動、川崎大師、高尾薬王院、池上本門寺、芝增上寺、小石川護國寺、淺草寺等の一流所の

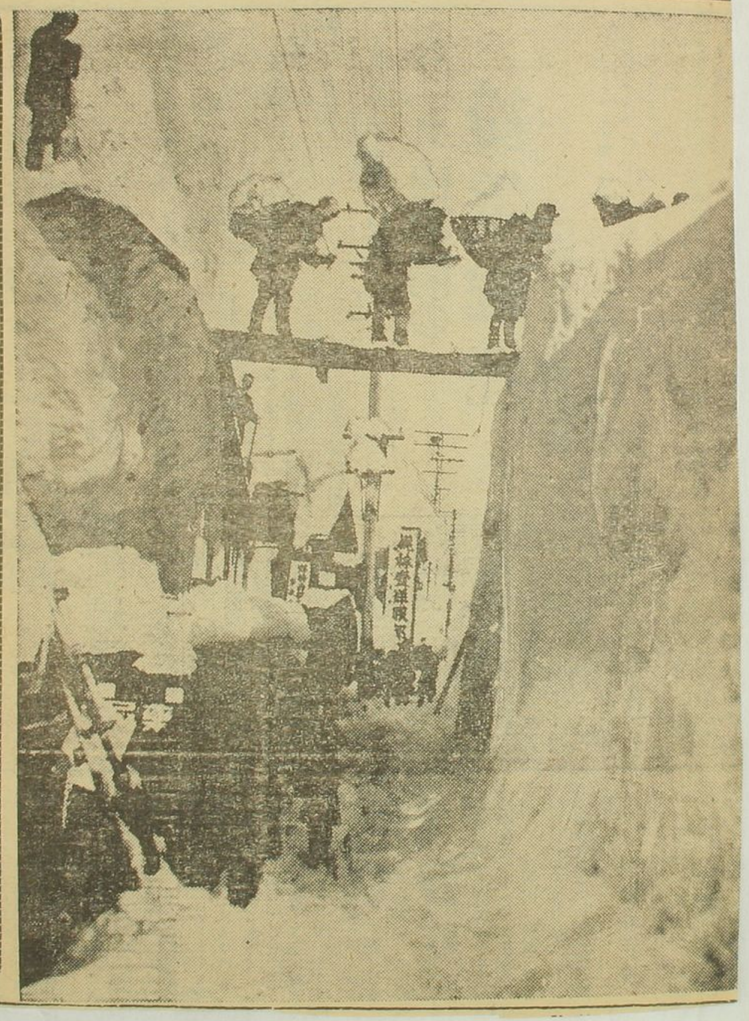
東　（七曜日）

**お寺**　では數萬、數十萬の善男善女の信者とタイアップしてお相撲さんや映畫俳優、さては藝者家から流行歌手などを年男に仕立て、これに女優やらレビュー・ガール、藝者まで動員、佛樣が泣く樣な黄色い聲を張り上げて賑やかなレビューもどきの「豆撒き」豪華版をつくり出しお寺の人氣を煽ぶる有樣――もと〳〵宗教儀式として始めて意義のある追儺式の

京　朝　日　新

「豆撒き」がかうも俗化し墮落しては捨て置けぬと宗教取締の元締、文部省宗教局がツムヂを曲げたのも無理もない、早速宗務課長橋本綱太郎氏は數日前、各宗本山に對して「宗教上の教化の目的に反する豆撒きの余興は本年から愼んで貰ひたい」と内示の形式で取締を申渡した、お寺の方でも所謂世間的の人氣者の賑り込みに惱まされてゐた形なので「いやなにも女優　など呼ばなくても…

複製



## ＝雪の城壁＝

（十日町風景）

ろだけの通路が設けられ反対側への往来が断たれ、交通は一物一雪のトンネルを利用するといふ寸法

中魚十日町では鳥瞰のやうな深いまでの雪の城壁が街の中に築かれ隣家にはわづかに煙と人の通れ

複写禁止

(8)子孫易酒亦可、小池澄波。蔵書印であるが子孫が賣ツパラッテ酒に易へても宜しいといふ洒落振は甚だ面白い。主人に忠義をせい親に孝行をせいト押付けてもだめである。よい書籍を澤山に残して置けば、酒に易へてもよいトいつてあつても、道を學んだ子孫が決してソンナことをするものではない。悟つた人のヤルことは違つたものである。併し印の書風は悟りがまだ十分ではない。一つ筆法を拝借していはう。『印の文字など一向に頓著しないでも宜しい』ト。

相章　うへ、真今のい二顆号、体と異まして共に演
村松（梅之）の刻であるが、年月義体の花とを
授けて居らるゝ。心若の如き思印全の評がおもしろい。
の摸んだものゝで
自分はこれを
花もの如くに
みるが、此の印の
文の他に無い
笑ひがある。自
分のを傍られ

今日でこそ、煙草の火を得るに、發火藥の燐寸を使ふから譯は無いが、昔は中々大變た業だ。斯の先づ一ぷくと言ふ段になると、而も技術を要する。燧石を以て發火し、始めて煙草に移す。若し大勢煙草喫みが其所に居れば、各自燧石を持つて居ても、面倒であるので、最初煙草に火を付けた人から、火を貰ふ、と言ふ事になる。斯うなると煙草の火と雖も、中々御粗末にはならぬ。尤も路上などで、誰か煙草を吸ふて居て、其れを見付けた煙草喫みは、自分の煙管を出して、火を御無心する。一寸腰を屈めて御禮を言ふ、てな値打さである。

○

左樣な事は誰しも知る所だが、支那哲學の五行の中に「木生火」と言つて約三千年の昔、木から火が出る理を知つた。然し支那ではただ、其の理論丈けに止めて、是を行つては居らん。理論こそ無けれ、日常煙草などを喫むに、この理を應用して居るのは、南米アマゾン沿岸の土人に於て見受けるさうな。其れは直經一尺位の丸本で一間位の長さの物の上に、馬乘りに乘る。其の中央に開いてゐる小さい孔へ、萬年筆位の棒をさし込んで、錐をもむ樣な事をし始める。其の中に馬乘りの、丸木の横の孔から、煙が出る。詰まり此の孔は、中央上部の孔と聯絡し、トンネルの樣になつてゐる。横の孔には、蓬の樣にもんだ草が詰めてあつて、火は其れに付く。其れから煙草に移してのむ。と言ふ仕掛である。所謂「木生火」の理に基づける煙草の火である。



複写禁止

昭和十一年一月二十七日 (二十)

# 娯楽案内

## 今日のあり方

女中 雪降り積つた田圃道を自轉車で走つてゐる女中

女子軍 軍服姿も凛々しく堂に入つた女子軍の訓練振り

女中 雪空を仰いで手を翳す女中

店員 番頭さんの上着を着て帳場に坐つた店員

店員 番頭さんの前掛を締めて小僧さんの仕事をする店員

人力車 文化鐵工業會の三輪トラックに曳かれて走る人力車

少年ボーイ 服裝も身のこなしも一人前の少年ボーイ

ルンペン 寒風に吹かれて歩くルンペン

## 人物

**立派な藝術品だと思つた**

……カブキを見て一番驚いたのは「シバラク」の型である、あの俳優はどうせ私の胸の邊り位までしかないだらうのに、私の二倍も大きな巨人である如き感じを與へてゐる、あの重々しい大きな衣裳を着こなしてゐる、あれは單なる仕掛けではなく、矢張りあれは藝の力によるものと思ふあれは我々西洋の芝居には非常に參考になる、シバラクが花道で見えをきる時の形は正に一つの造型藝術である、言葉は何も解らなくても、十分解るやうな氣がした

【寫眞は歌舞伎座の舞臺で】

**王の感想**

本で見て想像したのと段違ひに立派な舞台である、賑やかな色彩を持つてゐる、シヤミセンのやうであるが、余り解らなかつた、顏の作りのことは、余り獨特過ぎて門外漢には何ともいへない、女用の髷は

**立派**

**今夕七時半・日比谷公會堂で**

**シャリアピン獨唱會** 第一夜

ピアノ伴奏 ジョルシュ・ゴツツインスキー氏

【入場料】六圓、四圓(二回券は實切れ)

主催 東京朝日新聞社

開演時間一入場券に七時とあるは誤り

娯楽案内

# 聲樂の王者 〝暫〟に感嘆

## きのふ歌舞伎見物

いよ〳〵日本における第一回の獨唱會を行はうといふ前日の廿六日歌の王者シヤリアピンは發聲の練習と休息に一日を暮したが、午後三時から歌舞伎座に赴いた、それは千秋樂なのでこの日を外しては出來ないといふので夫人令孃同伴で出掛けたわけ、しばらく〝暫〟の一幕を見たわけであるが、「見本として見るにはあれでいいでせう」といつてゐた、オペラ歌手はいはば西洋の歌舞伎役者でもあるからこの方面の研究は既に十分してゐる、何册も參考書を讀んだといふから、素人の西洋人のやうに「なぜ、男が女になるか」「見物席を横斷して舞臺に續いてゐる廊下は何か」……などといつた種類の質問は一つも出なかつた

幕が下りてから樂屋で菊五郎、羽左衛門の扮する二婦人を兩側に抱いて記念撮影したシヤリアピン氏の曰く「この寫眞は女房が怒るかも知れない」羽左衛門の曰く「いやー、でつけいなあ」菊五郎曰く「あつしや、ドン・キホーテのトーキーを十一度見ました、最後の場面で本を燒く時の眼には感心しましたよ……さう話して下さい」

× ×

聲樂王の感想

本で見て想像したのと段違ひに立派な舞臺である、賑やかな色彩を持つてゐる、シヤミセンのオーケストラは原始的の音樂のやうであるが、余り解らなかつた、顏の作りのことは、余り獨特過ぎて門外漢には何ともいへない、女用の髷は

立派な藝術品だと思つた……カブキを見て一番驚いたのは「シバラク」の型である、あの俳優はどうせ私の胸の邊り位までしかないだらうのに、私の二倍も大きな巨人である如き感じを與へてゐる、あの重々しい大きな衣裳を着こなしてゐる、あれは單なる仕掛けではなく、矢張りあれは藝の力によるものと思ふあれは我々西洋の芝居には非常に參考になる、シバラクが花道で見えをきる時の形は正に一つの造型藝術である、言葉は何も解らなくても、十分解るやうな氣がした

【寫眞は歌舞伎座の樂屋で】

今夕七時半・日比谷公會堂で
シヤリアピン獨唱會 第一夜
ピアノ伴奏 ジョルシュ・ゴツツインスキー氏
【入場料】六圓、四圓(二回券は賣切れ)
開演時間一入場券に七時とあるは誤り
主催 東京朝日新聞社

今日でこそ、煙草の火を得るに、發火藥の燐寸を使ふから譯は無いが、昔は中々大變た業だ。斯の先づ一ぷくと言ふ段になると、而も技術を要する。燧石を以て發火し、始めて煙草に移す。若し大勢煙草喫みが其所に居れば、各自燧石を持つて居ても、面倒であるの

自分の煙管を出して、火を御無心する。一寸腰を屈めて御禮を言ふ、てな値打さである。

○

左樣な事は誰しも知る所だが、支那哲學の五行の中に「木生火」と言つて約三千年の昔、木から火が出る理を知つた。然し支那ではただ、其の理論丈けに止めて、是を行つては居らん。理論の中央に開いてゐる小さい孔へ、萬年筆位の棒をさし込んで、錐をもむ樣な事をし始める。其の中に馬乘りの、丸木の横の孔から、煙が出る。詰まり此ネルの孔は、中央上部の孔と聯絡し、トンネルの樣になつてゐる。横の孔には、蓬の樣にもんだ草が詰めてあつて、火は其れに付く。其れから煙草に移してのむ。と言ふ仕掛である。所謂「木生火」の理に基づける煙草の火である。

○

封建時代階級制度の激しかつた頃、平民が若し、士族屋敷に、煙草の火を貰ひに行くと、其の家の者は、火箸で挟んだ火を、屋外に投つたまゝ與へたさうだ。然し其の火は既に、穢れて居ると言ふので、再び屋内に入れなかつたさうである。其れでも煙草の火を欲しさに、、平身低頭して、御願ひ致したとの事だ。

○

## 煙草の火

其の頃路上で、煙草の火を人から貰ふに、双方から顔と顔を突き出し、煙管の皿を合はして、一方の人が火を移したのだから、用心家などに至つては其の時必ず相手の、煙管を押へつゝ火を移したさうだ。若しも先方の者に、其の時煙管を突き付けられて、目になど危害でも加へられる萬一の心掛けにやつたさうである。

○

富士山が噴火した頃、麗らかな日に遠くから此れを眺めると、頂きから悠々と煙が立ち登るので、野良で働いて居る百姓共は山から煙草に點ける火が吐いてゐると形容したさうだ。其の物が貴重な時代には、斯んな事に迄聯想される。

○

東北の或る小さな町では、自分の家の前を知人が通ると、「點けて行がい」と言ふ。是れは結局御寄りなさいと言ふ意味ではあるが、煙草の火を點けて行けと言ふ事である。詰まり火があります、煙草の火を提供しますと、言ふ事である。煙草の火の一寸求められた事である。煙草の火に氣が付いた。家に戻るも面倒だと思つて、掌式の灰皿をやらかして、歩いて行つた。扨て斯うなると、途中で消す譯にはいかん。消せば山道だから後が困る、遂々二里の道程を掌式の灰皿で以て、煙草の火を繼承して來た。と言ふ事がある。

○

田舎に於て必ず見受ける事だ。親爺共が煙草を喫む時、最初は燐寸を使ふが、二ふく目からは、吸殻を掌に載せて、其れに依つて煙草の火を點ける様にして居る。掌式の灰皿と言つて置こう。

○

或る田舎の喫煙親爺が、町へ用達に出る時、煙草に火を點けて出たは良いが、餘り急いで出た爲め、二三十間行てから、燐寸を忘れた事に氣が付いた。家に戻るも面倒だと思つて、掌式の灰皿をやらかして、歩いて行つた。扨て斯うなると、途中で消す譯にはいかん。消せば山道だから後が困る、遂々二里の道程を掌式の灰皿で以て、煙草の火を繼承して來た。と言ふ事がある。

○

一口に煙草の火と言ふと、火防の方面からは火災の種として警戒されるが一々禍になると許りは限らぬ。明治の初め頃、或町の通行人が、或る家に突然這入り込んで來て、煙草の火を丁寧に懇願した。當時今日の様に燐寸などは容易に無いから、家内中は不審も抱かず、座を譲つて爐の火で煙草を點けさした。(當時凡て燐寸は舶來で一ケ五錢位で賣買したさうだ)すると此の人は其れを良い事にして、其所にドツカと坐り込み、十ぷく許りを吸つてから立派に御禮を言つて、其の家を立ち去つた。當時未だ人間が朴訥であつたから、其れを左程問題にもしなかつた。其れにしても妙な人だと、、家内中が思つて居た。然し其れが後で判つた。此の事有つて間も無く、其の家の娘が他家に嫁に貰はれた。煙草の火を貰ひに來た人は、詰まり婿家の舅で、仲介人の話に依つて煙草の火にかこつけ、其の娘を檢査に來たのである。

藤原製

唯九寺そのみの形ふるさとかどうか、寺が既の冊
碧に日塗えもあるから、毎天子の宮殿も官署も初
宮の住宅も大抵り冊碧に塗えものばかりである
か、否々民家もの同じく冊碧に塗えものばかりである
でいあるまいか、全体遠桑に移宅をすることは日本
の風である。支那朝鮮の古代
は唐風を極端を模倣したから、遠桑を彩色を施
した、其の跡が今のあるらの法隆寺その他の寺々
ありくとあるしてもある、南時も民家も
彩色が施えんとすると、大抵い淡白冊碧
遠桑の黒木遠桑の檜木の
間の新を対連
ばかりである。

複原製

冊ちの二分の一分ふの数七色を落るへやう
を集かする、恐らく斯く想像することも許されやう
時は法隆寺の彩の色の
比のもあらう。

「冊碧」は土色のことをも大和の都を
奠める時の地ろくしの色の黒をさと
実人とその名の宮殿のめくる振るの
余の考の余が別
かに今て余の説を出して攻撃をも
とも、五十年は余の説也おもろし
と誇りう。

の年の節分を済ます放送を
聞き終り、さて四五の同志と共に傍近くて左の件を取
（遺忘に備ふ）

節分をセチブンとよむ
古歌に
年の内の春の来ぬれば今年とやいはむ去年とやいはむ
節の分れ目、三又は季の分れ目
季の入る
新しい年の儀式ちょっとか今は俗に
行るとやる
豆は撒くとは云わず打つと云ふ

複原製本

歳男は其年の干支すなわち
子年生れとすれば凡に
後者やお模を慈ふことは
やのと
豆を自分の年の数だけ
もとも拾うる）ともいう
厄落」と行う附帯行事も庶
地方のよう稍々異風のもの
七あるが、東京
とは深き観音様の例を挙めがしい婦人の服
装か三十数七着ちて
雪物杉江では節分の夜に
ても習慣がある 昭和 枕

鬼面を冠りる人間を追ひ回りすること滴方と行ハれん

浅草浅草寺から三十三節会」と書いる守札の
ちの字を割き、娘みよ」と服せしめんが為
まとう

七人の侍　暗中仕手蛟拗、打着袴方鬼服
時、
縦の字音那「おのやら」と訓す、三才図会ニ云ク
俗用追縦二字重言
大城の大奥ニ男を女装打倒ス服物を
やつて祝すること四十子庭訓ニ
甲子庭訓ニ載るお名の家ハ内、福の内、

模原製

富の内とまるで鬼の外と云ハぬ家ハなく
今夜浅草の一節会の厄払ひの羽をおさ
アこう、メデタイナ、〳〵、ダンナ往来御免
ソリ梅カテ西ヲすかしハ七福神の舟アリビ中ル七
夫と云人ハ金柄ノ楳チモチ、メキスラギスノ
延ヲツケ、金ト銀トノ針オタレ、釣ル人ノ網、カホドメデタキ大リカラニ、イカさん悪魔
が未ルトモ、北尾ハうとも、ヒットうん、西ノ海ハ
オモ〳〵、ナリうが汁へサラリ
鶴衣の着者ハ光悦ぬ入の文行手の紙を心ヨ
ろを浅ましる、ヌルヌル日紙うる〳〵セうを浮さるを
必一ぎ也

まとめる。閒と閇とは同じやうに書かれてゐるが

實ハ閒も閇も同じで本ハ閒の一字で、門の隙から月が見ゆる象、スキ、マ、アヒダ、ヒマ、ゲン、ジツカ讀む字である。通例人間、十間、間島、間宮、間口などハ間の字を書き來る。むかし禮記ニハ天地玄閒也と云ふ。莊子ニ夫杖不杖之閒など中を用ひて書いてあるが、これが本體である。但し漢籍などにある通しなるが、いつの間ニかアヒダマの方も間とし、ヒマ、ジツカの方を閒とする習慣となつた。併し閒ハ俗字なれバ篆字又ハ此字を略ふ。間の略閒宮と刻する時も閒字を用ゆべし。

○日本の交通歴史を考ふる時ハ吾等ハいつも佛教徒が深山峻嶺を平地の如く往来しれしことや、寺をひらく又地を未拓の處に拔かしれしことや、道らしき處ニ道をつけ橋なき所ニ橋をかけなどしれし吾等ハ思ひ到らさるを得ない。佛教僧の内ニも山伏と呼ぶところが殊ニ山岳開拓道路開通と申功があつたといはれん。其の代表者として役小角(エンノヲヅヌ)がいつもうかばれるが、小角ハ實際山嶽開拓者であるけれども山伏の創祖ではない。彼ニ小角の事跡が偉いのでこれを崇めて祖としれのであらう。全体此宗旨ハ始めハ善通(修驗道)と云はれ、或ハ雜宗と称されてゐる。當時は雜駁のもので、密教の思想が交りゐんであるが、吾國固有の神祇信仰、支那の道教思想などが錯混したもの全

日本の剣道それは武家時代の風俗の名残りである。

北高時の風俗の変わったのが、よく日本の如きと云うやうに思われ得る、其の雑駁であるのも日本のアダプトするやうんしたことを云いなさる。

日本は山岳国であるから山嶽思想がある、山嶽を神聖視もする。修験者は之に似たる無上の浄地とされ、神仏のそれも通じて山嶽と信ずる。思想の神仙思想もここに参加し、深山幽谷を仙人が居ると信ずるなど、難行苦行が鍛錬の法である。

のび、峻山高嶺、者と」所を行くのが其の鍛錬の法となる。

死溺と称して烹行の日を大切の鍛錬法とし、猛獣を制し、雷雨を浅くるが如きも身心を錬ることを利用された。

世の傍係がそれぞれ我慢する事を実践躬行しなければ自から仰を一般に信じ難き者と思ひます。

人のことと身体とを拵らへ其の本動を鳥の如く軽くし、所謂天狗の伝説を起さしむるのと。

もしこんな時代の傍輩を思ひあさしむるから、山中等に野宿し猛獣を防ぐの武装も必要であったのだ。

此の地の心身共に鍛えた人と云うのが山野跋渉をまたとなるべく山嶽が拵けられたのだ。

八後世も伝はずる残されたる山嶽を通ずる役小角の名前の如きは、延長九年七十八歳で寂したが、

聖宝が吉野、醍醐の後嗣、義淵の弟子で日本の山岳を開いた人物で拵えた。

今日山登りをスポーツとして行う先輩が残した所を跋渉する。

横原製

三月若菜　永光作



も咲とまる連中からろ〳〵先輩の芸を思ひ切り、其の盛典を行ふことをもつて可とすと思ふ

（後援道）の壺山派と云ふ流派の所謂三宝院流と四聖寶流から起つて居るこれ等の流派の一派分れる壺山派と称し傍系と其の原型とするものである。

の奈良の枕詞の「ち丹」とあるのは丹塗料を施した丹色彩かく未だ施したと自分の考へ方と記したが、これのひとつの「保」を活用した形和生活」を読んで見ること、自分との比較の考へ方

一三四頁

未だ日本猪特の著書を通じてゐるのを見ると「丹」とする説が奈良とそこの丹を塗つてゐる事は、奈良の都から丹を以て塗られた家屋の柳比べられるあるかを示すと家屋を塗つた

橿原劇

丹を以てするの支那説味

以下
9丁
白紙